

第 3 卷

# 成 者

SEIJU

1985

夏 程



横浜 善光寺刊

拝啓 お盆の月も残りなごとも  
御多用のことと存じます

さて「成壽」茅三考が叢刊に  
なりましたのでお送りいたします

今回は茅一面が学僧のタイ図  
派遣に伴い南方の佛教

特集いたしましたので御覧を  
お待ちしております

末筆ながら時節柄に健康を  
祈念し保せし倍旧の御協力を  
お察し申上げます  
合掌

七月吉日

善達寺住持黒田大因

(武志)

各位

かしこきひと  
賢哲

底深き淵の  
澄みて  
静かなることく  
心あるものは  
道をききて  
こころ  
やすらかなり

「法句経」



# 森 壽

SEIJU

1985

夏 程



南方仏教の仏・法・僧

仏



仏陀坐像



仏陀と二弟子



仏陀立像



仏陀立像



# 南方仏教の仏・法・僧

# 法



1. パーリ聖典 (タイ) その1



2. パーリ聖典 (タイ) その2



3. 仏陀伝記 (ビルマ)



4、<sup>い</sup>貝 <sup>た</sup>多 <sup>ふ</sup>羅

1、パーリ聖典 その1

タイで書写製作されたもの。写本の前後にタイ文字（タイ語）による奥書説明があり、本文は古クメール文字。内容はパーリ聖典、さらに新クメール文字（タイ語あるいはカンボジア語）による註釈・説明を加えている。

パーリ聖典の内容は戒律関係で

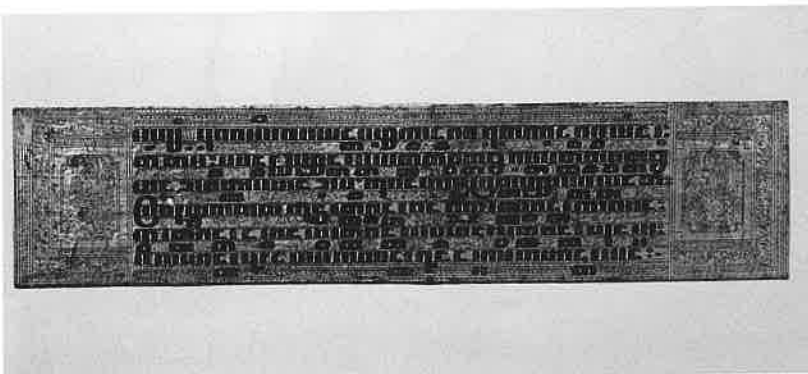
『律藏』経分別、第1波羅夷 (PTS) 新

Vin.iii. I の(1)まで；写本のP.3. 73

P.4. 74に比附) 等の選集である。

2、パーリ聖典 その2

タイで書写製作されたもの。古クメール文字、内容はパーリ聖典。さらに新クメール文字（タイ語あるいはカンボジア語）による註釈・説明を加えている。



### 5. パーリ聖典 (ビルマ) その3

パーリ聖典の内容は論 (アビダ

ルマ) 関係で、パーリ七論すなわち

(1)法集論 (Dhammasangani) (2)分別論

(Vibhanga) (3)異説論 (Dhātukatha)

(4)人施設論 (Puggalapapañatti)

(5)論事論 (Katharathu) (6)双対論

(Yamaka) (7)発趣論 (Mahāpāthāna)

よりの選文である。

3、仏陀伝記

ビルマで書写製作されたもの。モ

ン文字 (モン語) で書かれ、仏の伝

記を内容としたジャータカ (Jataka)

の一種である。奥書にビルマ暦二二

六八年 (西暦一九〇六年) に書写さ

れたとある。従って七十九年前のも

の。

4、貝多羅

セイロンまたタイ・カンボジア系

の写本ではなく、ビルマ系の写本で

あろう。従って、書写製作地はビル

マと考えられる。

5、パーリ聖典 その3

書写・製作地はビルマ。古ビルマ

文字 (パーリ語) で書かれウパサン

パダー (具足戒受戒式事) の中の白

四羯磨、すなわちカンマローチャ

(Kammavācā) を内容とする。書写

年代は二〇〇〇〜三〇〇〇年ほど前と思

われる。

考証 阿部慈園識

(東方学院講師)

●以上の写真は善光寺収蔵品を撮影

したものです。

撮影・五十嵐千彦



南方仏教の仏・法・僧

僧



ワット・パクナム サラー(斎堂)に向かう僧たち

風をまとつて

黄衣の僧が行く

ひたすらに

自らを律し

ひたむきに

仏陀の笑みを求めて

僧たちの瞳には

青い空が映っていた



得度式後、仏陀を礼拝する



布薩（懺悔式）



ワット・パクナム 前任職、中興の祖ロンポー（我らの父）記念堂



来日されたワット・パクナム住職（前列右端）と共に  
パクナム副住職（前列左端） 黒田方丈（中央） 留学僧  
梅田師（後列右端） 留学僧田中氏（後列中央）





布をまとう仏陀——チェンマイ（撮影・中村正信）



## 大悲の仏国

褐色の大地の上に

きらめく金色を見つけたら

そこには必ず仏陀がおわす

大いなるふところを開いて

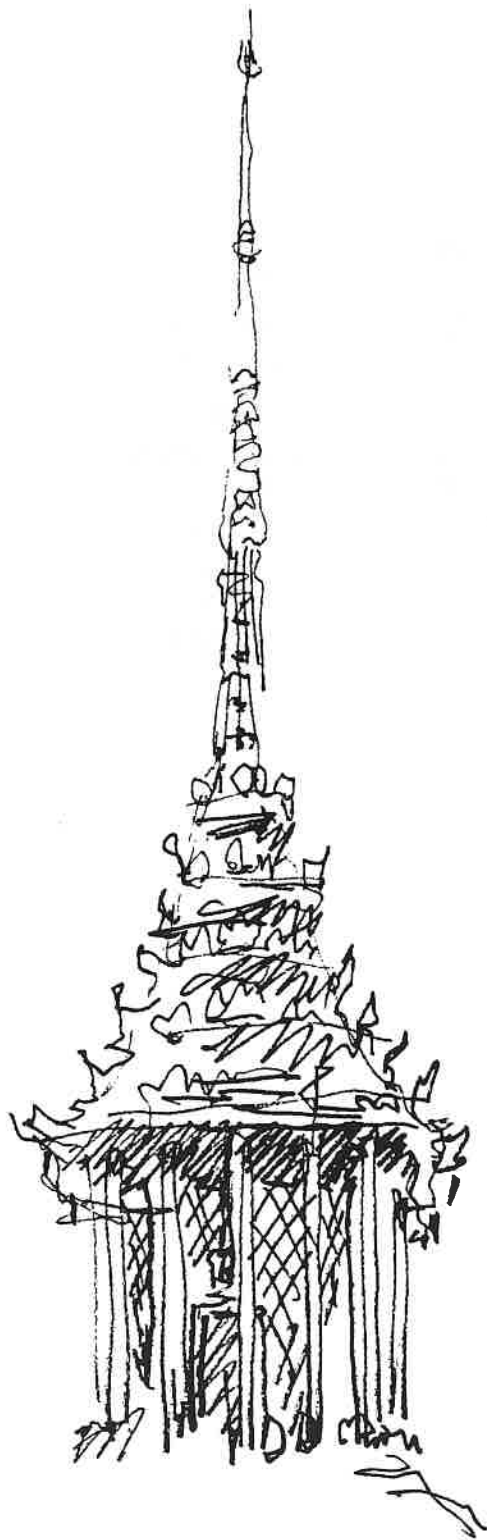
誰をも拒むことなく

祈りはほほえみに似て

さり気なく

やさし気に

ひっそりと風をふるわせていた。



ワット・エメラルドにて

賢 哲 (かしこきひと)

カラー特集 ■ 南方仏教の仏・法・僧…………… 2

海外留学僧の派遣に渾身の力を…………… 黒田 大圓 18

海外留学僧を送るの辞…………… 佐藤 俊明 20

超宗派の海外留学僧派遣…………… 東 隆真 22

座談会 ■ タイの僧院での生活…………… 26

不動明王大祭…………… 52

善光寺海外留学僧派遣育英会基金勸募趣意書…………… 56

レポート ■ タイ留学僧からの現地報告…………… 58

タイ僧伽へ加入するまで…………… 田中 智誠

得度式を了えて…………… 梅田 尚平

説話 ■ まごころの通ずるすがた…………… 佐藤 俊明 70

論 文 ■ 第一期留学僧論文……………

詩 ■ 観世音声を限りに…………… 遠藤 太禪 73

編集後記

● 表紙絵・題字・カット 伊藤喜二郎  
● 写真 五十嵐千彦

## 海外留学僧の派遣に渾身の力を

山主 黒田 大圓

前号において善光寺海外留学僧派遣育英会の設立につきご報告申しあげましたが、昨秋、本山僧堂及び地方僧堂、それに、仏教ないし宗教に関する学部を有する二十有余の大学に募集要項を送りました。その結果、浄土宗と黄檗宗からそれぞれ一名、梅田君と田中君が第一回派遣留学僧に選ばれ、去る四月十八日、勇躍タイ国に向って出国、目下、ワット・パクナムにおいて修行中であります。国際青年年の今年、有為の人材を海外留学僧として派遣する第一歩を踏み出し得たことは、まことに意義深く、私が無上のよろこびとするところであります。来年はアメリカの禅センター（ロサンゼルス禅センター・ニューヨーク禅マウンテンセンター・ニューヨーク禅コミュニティ）にも留学僧を派遣する予定

であります。アメリカの禅センターの前角老師は、すでにロンドンに禅センターの支部を開設しておられますので、近い将来、その方面にも留学僧を派遣する道が開けてきており、まさに前途洋々たるものがあります。

海外に留学僧を派遣して人材の育成をはかり、もって仏法の興隆に寄与させていただく事こそ、私の報恩行であり、また悲願であります。

『正法眼蔵・弁道話』に「国家に真実の仏法弘通すれば、諸仏諸天ひまなく衛護するがゆえに、王化太平なり。聖化太平なれば、仏法そのちからをうるものなり」とありますように、仏法の興隆は即世界の平和であり、世界が真に平和であればそれが浄仏国土なのであります。浄仏国土の建設のため、私は粉骨碎身、海外留学僧の派遣に渾身の力を注ぐつもりであります。

何卒、善光寺外護の皆様方の、深甚なるご理解と、絶大なるご支援を、切に望んでやみません。

# 海外留学僧を送るの辞

常任理事

佐藤俊明

## 留学僧歡送会に於て

善光寺さんとはじめてお会いしたのは昭和五十一年の六月ごろだったと思います。『仏教タイム』主催で「総持寺の海外布教を考える」という座談会があった時のことです。

大本山総持寺は、港ヨコハマの近くであり、航空機時代になるとより近くに羽田空港があるといった環境に恵まれ、外国の方々がよく参拝に來られる関係もあって、誰いうとなく「国際禅苑」と呼ばれるようになっておりました。そんなわけで総持寺にとっては海外布教は常に大きな課題なので、そのようなテーマのもとに座談会が行われたわけです。当時私は本山の出版部長でしたので、当然その座談会のメンバーに加わる

ことになったのですが、その座談会の席上、善光寺さんが、「総持寺が真に国際禅苑たるにふさわしい本山となるには、まず、南方上座部仏教との交流をはかり、相互理解を深めるべきであり、そのためには毎年留学僧を送ってしかるべきではないか」という提案をなさいました。これには私も大賛成でしたし、その提案がみのつて、翌五十二年、本山から三名の留学僧を送ることになり、加えて総持寺に国際部が設けられ、善光寺さんは次長に就任されました。こうして発足した総持寺の留学僧派遣、はじめのうちはうまくゆくかみえたのですが、どうも本山というところは、古いことを墨守するには抵抗がないのですが、前向きで新し



いことをやろうとすると途端に拒否反応を示すところで、この留学僧派遣もわずか三年で火が消えてしまいました。

この時、「ひとに頼ってもダメだ。よし、独力でも俺がやったろう」という悲壮な決意が善光寺さんの脳裡に閃めいたのだと思います。そうでなくては、善光寺海外留学僧派遣がこんなに早く実現するはずはないのです。というのは、一昨昨年十月、釈迦殿が完成しましたが、それまでは善光寺さんは釈迦殿の建立に全力投球しました。釈迦殿が完成して、伽藍の整備が一段落しましたので、こんどは留学僧派遣、一昨年準備

をいたしましたして、昨年一月十五日、成人の日の吉辰をトして「留学僧派遣発足準備委員会」を開催、ここにめてたく企画的な大事業が発足したのです。このような大事業は本山か、一宗の宗務当局が実施すべきもので一ヶ寺が実施するにはあまりにも大きな事業であり、そして険しい道であります。善光寺さんは、それをあえて独力でやり出したのでして、名譽ある第一期の留学僧に選ばれたのがあなたがたお二人なのです。どうかお二人は、善光寺さんのこの遠大な理想と骨身を削ったこのご精進を肝に銘じ、研鑽にはげんでいただきたい。タイ国には、諸外国から留学僧が来ておりますが、中で一番評判のわるいのが日本からの留学僧であります。どうかわるい先輩の汚名を返上して、日本留学僧ここにありの心意義を示していただきたくお願いたします。

最後に、この大事業のカゲの力となって方丈さんを支えてこられたのが奥さんです。方丈さんに対するとともに奥さんへの感謝をお忘れなようお願いします。



# 超宗派の海外留学僧派遣

## 仏教の現代的使命

東 隆 真

神奈川県横浜市の善光寺（曹洞宗）住職・黒田武志（大圓）師は、昭和五十九年一月十五日、「宗教法人善光寺海外留学僧派遣育英会」を設立した。

国際的視野に立ち、広く世界に活眼を開く仏教僧の育成を目的とするのである。

このたび、すでに本紙（三月八日付）が報道されており、第一回の派遣留学僧として、梅田尚平師（浄土宗）、田中智誠師（黄檗宗）の二師が決定した。まことに慶賀の至りである。健康に留意されて、思う存分ご精進くださるよう期待し、祈念したい。

黒田師は、十五年まえ、横浜市営日野公園墓地のそばに善光寺を開創した。

ゼロから出発して、いまや千数百軒の檀信徒を擁する寺運の隆盛を見るに至った。

およそ二十余年まえ、駒沢大学仏教学部、同大学院を修了後、曹洞宗大本山永平寺、大本山総持寺僧堂に掛錫し、やがて日本全国一周行脚、さらにインド仏蹟を巡拝し、タイ国の僧院に身を投じ、また、アメリカで白人の参禅指導にあたった。

こうした国内、海外での修行生活の経験をもとに、仏教者としての現代的使命を痛感して、次代をになう国際的仏教青年僧の育成を発願したのである。

すなわち、海外に留学僧を派遣して、人材の育成をはかり、仏教を振興し、世界の平和と、人類の進運に



田中、梅田両師の得度式

寄与したいという壮大な誓願である。

かねてよりの宿題のひとつが、善光寺開創十五周年記念事業として、この育英会の設立となって具現した。

留学僧の派遣先はタイ・バンコクのワット・パクナム、アメリカ、カリフォルニア州のロサンゼルス禅センター、イギリス、ロンドンの同支部である。

第一回の留学僧、梅田、田中の両師は、タイ国のワット・パクナムに、この四月中旬から一年間、留学して、上座部仏教の修行生活を实地に体験する。ここは、かつて黒田師が、石附周行師（日本パクナム会会長）とともに修行したゆかりの地である。

来年に予定される第二回の留学僧は、アメリカのロサンゼルス・禅センターに派遣される。

ロサンゼルス・禅センターは、主管前角博雄老師が、三十年まえに開教師として渡米し、十八年まえに開創した。老師は、黒田師の肉兄である。

同センターは、アメリカ人の出家僧と在家信者とからなる共同体社会（サンガ）である。全米に十二の支

部があり、信者二万人をもち、イギリス、ロンドンにも支部がある。

また、付属研究機関「クロダ研究所」は、厳格な坐禅実習とともに、日米の学者たちによる「道元学会」をカリフォルニア大学で開催している。

さて、「善光寺海外留学僧派遣育英会」は、現代の日本仏教界で、どのように評価し、位置づけたらよいだろうか。

とりあえず、私は、次の三点をあげておきたい。

第一点は、国際化を増す現代日本仏教の典型を、ここに見るのである。

明治以降、日本仏教僧の主としてアメリカ、ハワイの開教活動は、各宗でとりくんできた。いまも、開教の苦闘は、孜孜としてつづけられている。また、チベットの、ビルマ、タイでの仏教研修も行なわれている。逆に、来日して仏教を学ぼうとする外国人も、この数十年來、増加の一途をたどっている。禅僧とキリスト教神父の交流も、このところひんばんである。最近は、



フランス人禅僧の日本布教まで見られる。数十年前、はたして誰が、これを予想しえたであろうか。

黒田師は、こうした過去の先人たちの苦勞、現代の国際情勢に呼応して、海外における実地の修行生活を通して、世界的視野に立つ人材を育成しようというの

である。

海外の開教に一生を捧げるにせよ、日本で教化活動に挺身するにせよ、これからは、世界的視野と、国際的感覚を身につけた仏教僧の登場が、もつとも望まれるわけで、こうした人材の育成ほど、緊急かつ重大な企てはあるまいと信ずる。

第二点は、この育英会は、いわゆる大乘仏教といわれる日本の善光寺を本拠地として、タイの上座部仏教、そして白人社会のアメリカ、イギリスの禅センターを結ぶ、世界的空間の規模をもつ仏教研修のシステムである。

それぞれ異なった地域で、独自の伝統と文化をつくりあげてきた、また、つくりあげつつある仏教の内実を学習するには、留学僧個人にとつても、仏教の将来にとつても、まことに意義深い機関である。

それだけではない。

人類は、宇宙時代に入り、世界はあたかも一国の観を呈するほどに、時間的、空間的にいちじるしく短縮

されてきている。

しかし半面、人類は、かつてない不安と絶望におかれている。この現代社会の悲劇をまえに、仏教の絶対平和、和合の原理を具体化してゆく、ひとつのかけ橋をつくりたいという悲願もここにはある。

第三点は、この育英会は、黒田師個人、善光寺一カ寺の企てである。全仏教団、一宗全体の大組織の事業ではない。しかも留学僧は宗祖を通して釈尊にかえるという着眼点に立ち、一定の資格と志さえあれば、所属の宗派を問わないのである。

このような破格の企てを、寡聞にして、私は、ほかには知らない。この聖業を多くの人々が知っていただきたい。同時に黒田氏の壮挙を高く評価したい。

第一回の留学僧の派遣が成された今日、さらにすすんで応募し、また、志ある若人を推挙していただくよう、関係者の一人として、天下に切望してやまない。

(中外日報より転載)

# 僧院での修行

黒田大圓 (武 志)

伊達木昂訓 (たかのり)

司会／ 佐藤俊明 (しゅんみょう)



伊達木昂訓

神奈川新聞社会部記者



黒田大圓

成寿山善光寺住職

## ●座談会

# タイの

### 金は天下のまわりもの

司会 会々今日はお忙しいところおいでいただきまして  
ありがとうございます。

伊達木 〓いいえ、どうも……

司会 会々実は『成寿』の先月号で、方丈さまが「大なる哉ころ」という題で、とても面白いお話をなさったんです。それは、大学を出られて日本一周なさるまでの



司会／佐藤 俊明  
千葉県龍光寺住職

話なんです、それから次はタイに行かれる訳なんです。という動機でタイに行かれたのか、そのお話をしていたら、それからタイでのいろんな出来事などについてお話を聞きたいと思うんですが、さいわいタイで、伊達木さん、お会いなさったそうですね。

伊達木 〓そうですね。

司会 会々それじゃ方丈さん、まず、タイにお行きになられた動機をお話したいんですが。



タイ修行中の黒田方丈

方丈はいい、大学から大学院終わってアメリカへ行こうと思っておりましたが、アメリカの兄からも少し修行しろといわれ、特別僧堂に入ったことは前の講演の中でお話し上げた訳でございますが、特別僧堂といっても、大衆と同じ事をしている訳で、これでは何も特別僧堂の意味がないじゃないかと、非常に疑問を感じ、2年目ごろから「ここにおっても仕方がない。何かやろうか」というような事を考えました。

その時は、石附周行師が、「特別僧堂がおわったらインドに行つて、インドの仏蹟を参拝しよう」というもんですから、「それは素晴らしい事だ。よし、インドに行こう。しかし、ただインドに行つて仏蹟を参拝するだけじゃ意味がない。ついでにタイに行つて修行しようじゃないか」と、というような事を話したら石附君も「そりや、いい事だ」と、話がまとまったんです。さて、中外日報がその当時、立正佼成会と共にインド仏蹟の巡拝団を構成してましたので、第2回目があれば中外日報主催のインド仏蹟参拝団に入りたいと、中外日報の社長に相談に行つたんです。「参拝団に入れていただきたい。ただし帰りはタイに残つて修行したい」というと、本間社長さんが、「それじゃ、タイで修行したのがあるから紹介しよう」といって、島口という方、もう亡くなつた方で、喜禅老師のお弟子でしたが、バンコックから帰つてきたんですが、曹洞宗では受け入れられなくて日蓮宗で、お寺を持つた方なんです。その方はインドから、飛行機の中に隠

して、菩提樹の根のついたものを持ってきたという変わり者なんです。その方から修行するならワットパグナムがいい、と教えていただきました。ちょうどその頃父親が全日本仏教会の組織局長をしまして、色々調べておりましたが、中山理理先生がタイ国の妃殿下と非常に親しいことがわかり、それでタイ国の方にわたりがついたわけです。全日本仏教会では中山先生がプーン妃殿下に紹介の労をとってくださいました。それで日本仏教会の推薦という形でタイに行けることになりました。たまたまその時に、世界仏教徒の青年の会議がサイゴンで開かれるっていうんで、タイで修行したあとは東南アジアを全部まわろう。サイゴンの仏青の世界会議にも出よう、というような目的で事を進めたんです。この時は金がないんで、本山に金を貸してくれといったら、当時の副寺さんが、本山当局で金を貸してもいいと言ってるっていうんで、それじゃ特別僧堂の安居者全員で行こうということに話がまとまったんですが、その後雲行きがあやしくなって、本山



得度式の供養の品々

では金を貸さないとということになり、結局は特別僧堂の中では、僕と石附師と平井師と、それから、森山大行師とで行く事になったのです。インドの仏蹟を参拝してタイで修行しようというのにはそれなりのきつかけがあったんです。というのは本山で修行していると、「これでいいのか？」という疑問に逢着し、この疑問





ナコン・パトムの仏舎利塔

を解決するには、釈尊の四大聖地をまわり、上座部仏教、南方の僧侶たちが何を求めて修行しているのかということをこの眼でたしかめ、宗祖の教えを通して釈尊に還ることが必要だということが、行く最初のきっかけになったんです。しかし、お金もない。インドに行くなどということは、そのころはたいへんなことでした。

司 会 金はいくらぐらい必要だったんですか？

方 丈 中外の会費が四十六万円ぐらいだったんですねえ。しかしその四十六万円というのは大変な金だったんです。本場で金を貸してくれないというもんですから、これはダメだということで、親父に話しました。すると親父は「お前にだけける金全部出せない」というんです。そりやそうでしょう。私、兄弟七人おりますから……（笑）「これはえらい事になった」ということで、ナリスに金を借りに行った訳ですね。インドに行ってお釈迦さまの四大聖地をまわって、タイで修行をして、世界会議にも出たいけれども金がありません。成功したら必ずお返ししますので、社長さん、金をなんとか拝借できますか」と言うたら、「先生、いくらいる？」いや、「いくら持つてる」というから「金はいま一銭もありません」といいました。一銭もないけど、いくらかかるっていうんで、四十六万円かかるっていいましたらね、「四十六万円か。で、どのくらい生活できるか」というんで、「それで一年間で

きる」って言ったたら、「安いもんだ。ヨーロッパへ行ったら一か月間分だ。一年間生活できるなら安いんじゃないか。考えよう」というんですね。その場は引き下がって帰ってきた訳なんです。そしたら、金の用意できたっていうんでナリスに行きました。たまたま父親が、その時は全日仏の局長してまして、よく京都に出張するんですが、出張のうちに、父親と一緒にお礼に行つて、お金を頂戴した訳なんです。その時がまた非常に劇的で、大きなお盆にのし袋に入っているものをうやうやしく持つてきて、私の前に差し出したんです。ところがペシャンコなんでこれは、お金入れんの忘れてんじゃないかと思つてですね、もらつたのはいいが、中に入れるのを忘れたんなら、何とか金入れてもらうように言わなくちゃと、思つていたんですが、父親と、それを頂戴して帰りました。しかし、心配でありませんでした。入つていなかつたら、早く言わなくちゃならん。家に行つてカラッポだつていう訳にはいかないんで、大阪の駅で開けたんですよ。そしたら五

十萬円の小切手だつたんです。それで飛び上がつてやるこんで、それを懐にねじり込むようにして東京に帰つてきて、銀行に行つたんです。これすぐに現金にならないですかと言つたら、「横線があるから、これは現金にはならない。通帳つくりなさい」といわれて、通帳をつくり三井銀行に預けて、インドに行けるといふようなことになつた訳なんです。そんな事がスタートの、金作りの最初だつた訳であります。

司 会Ⅱしかし、ナリスも偉いですが、方丈さんも随分心臓が強いですなあ。

方 丈Ⅱハハハハ

司 会Ⅱだつて、ナリスとは、参禅会でちよつとお会いしただけでしよう？

方 丈Ⅱそう。ナリスの先代の社長が、「しかし黒田君はすごい人だ。一銭も金を持たないでどこへでも行くつていう。先生はたいしたものだ」とほめて下さいました。

司 会Ⅱいやあ、本当ですなあ。



アंकロー比丘（黒田方丈）

方 丈ハア

司 会ニで、その金返したんですか？

方 丈ニいや、お返しして居りません。いずれ成功した折にお返しをしなければと思つて居ります。

（一同笑）

司 会ニそれは、いつ頃なんですか？

方 丈ニそれがですね、昭和四十年の七月頃であります。

司 会ニで、向こうに渡られたのは？

方 丈ニええ、四十年の十二月に。

司 会ニ十二月に？

方 丈ニハア。十二月の二十日過ぎにインドに、第二回の中外日報のインド仏蹟巡拝団員として……ええ。

司 会ニインドの仏蹟を巡拝して、それからタイに行つたんですね。

方 丈ニそうなんです。

### タイ僧となる

司 会ニタイにお着きになったのは？

方 丈ニええ、一月の十日過ぎ頃だったと思います。

インドだけで十六日ぐらいおりましたから。いや、インドだけで二十日近くおりましたから一月の末にタイに入ったんです。で、タイに入りましてね、最初……

三日はホテルで休養してまして、その時、講演で申し上げました伊藤先生に叱咤激励していただいて、石附君とお寺に入って、それから、お寺の生活が始まるんですけれども、その時には、私、過労と風邪をひいたりしまして、少し具合が悪くて、板の間に毛布を敷いて寝てましたから、調子が悪くてYMCAに行くて、そこで一週間寝て、パリー語の得度式の唱えごとを全部暗唱しました。それで、得度式を二週間ばかりのばしてもらって得度をしたんですね。ワッポーといいまして、その時はタイで最高の高僧の方、マハニ会の長老でしたが、その方に戒師さまになっていただくというんで、夜、石附君と二人でお願いにあがったんです。その時がまた印象的でした。大変おやせになっていた住職でしたが、その目の鋭さは、ぼくがいまだかつてそれほど目の鋭い宗教家に会ったことがないほど何か、竜の目のような、人間じゃないような目付きをしているご住職でしたね、その方に戒師になっていただいたんです。式の時も中山理理先生の紹介で、プー



ン妃殿下も得度式にお出ましくださって、国をあげての大歓迎をしていただいたような得度式をしていただいた訳です。  
司 会川いまマハニ会とおっしゃったんですが、そのへんのことを少し……  
方 丈川はあ、タイでは日本のようにいろいろ宗派は分かれておりませんが、マハニとタムユットの二つの派があるんです。これは今から百五、六十年前になる



んですが、タイでも戒律が乱れてくるんですね。それで、タマユツトという方が、これは皇室の方なんです。出家なさって素晴らしい学者でもあり、発心堅固の方でしたがその方が、戒律の乱れたのを直そう、戒律をもう一度見直そうというんで一派ができたんです。皇室の方、王さまの子供さんでしたからタマユツトは。そんな関係で、只今、王室の方の關係が強いですあります。マハニ会っていうのは古い伝統を保っている訳であります。これは、二つの派から八人ずつの素晴らしい方が、サンカラージャ、ソムデという役があつて、その中から管長さまがサンカラージャというんで、その両方から、タマユツトとマハニ会から交互に管長が出るんです。二二七の戒律を守る事は同じですね。われわれ日本人からいわせると、マハニ会とタマユツトと分れてはいるが、教義の上ではさほど大きな違いはありません。日本のような宗派の仏教じゃありませんので、大きく言えばもとは変りないと解釈しております。

司 会川ああ、そうですか。そのマハニ会のワツポー

の住職から得度を受けた訳ですね。

方 丈Ⅱ得度はやはりマハニ会の方から受けないと……マハニ会におつてタマユツトのを受けるといふ事はできない訳ですね。

司 会Ⅱワット・パグナムはマハニ会なんですね。

方 丈Ⅱええ。古いほうの形です。

司 会Ⅱ得度を受けるには相当経費もかかって、施主というか、スポンサーが必要なんですね？

方 丈Ⅱそうなんです。

司 会Ⅱそこらへんの経費はどんなふう……。

方 丈Ⅱはあ。これはですね、戒師さまにお礼、その他いろいろありますが、私の時は、戒師さまには自分でお礼をしましたんですが、普通の場合は全部お金を出してくれる人がいるんですね。というのは、お坊さんを、二十人三十人とお立ち会いたいただきますから、得度する時に、全部の人に供養する訳ですね。で、その供養の品物は、日常使うトイレットペーパーとか歯ブラシとかハンカチのようなものとか、日常お

坊さんが使う物を、お盆の上にたくさんおせて、供養していただく、それは供養の施主がいらしてね、よろこんでご自分の財力を投じて供養してくれる訳ですね、ですから日本の場合とは全く違って、民衆と僧侶の關係が実にピチツとしておるようです。

司 会Ⅱそうですねえ。それで、得度を受けられたのが二月で、安居に入つたのはいつですか？

方 丈Ⅱ安居は七月になる訳ですが、その頃僕——結局は一人帰ってくる訳ですね。あとは行ったり来たり。管長さまを案内したり、とそういうふうな事になったんです。

### 仏縁の不思議

司 会Ⅱそうしますと、伊達木さんがお会したのは？伊達木Ⅱちよつと考えてみたんですが、確か四十一年の二月末か、三月頃だと思ふんです。

方 丈Ⅱ来たのがネ。それですから得度して間もなく



戒を受ける黒田方丈

ですね。春休みでしたね。

伊達木〓そうですね、春休みの前に行きましたんで、多分、着いたのは二月末か……

方丈〓それでパグナムに来たのはそう早くないんだよね。それで何日かおつて……

伊達木〓そうですね。そうですね。

方丈〓それは、僕の記事をみれば全部克明に……

司会〓伊達木さん、その当時は学生だったんですか。

伊達木〓学生です。ハイ。

司会〓タイには何かの用で。

伊達木〓それが、ご用つて訳でも何でもありません。

前の年に私、沖縄行きましたね。夏休みですけども、当時はまだアメリカの占領下にありましたんで、パスポート取つて沖縄に行くっていう形で、それは、友達と何人かで行ったんですが、それがひとつのきっかけみたいで、もうひとつ外国へ行ってみたいっていう気持ちで、私が潜在的にあったんですね。そうこうしているうちに、私、中野に住んでたんですが……高校時代の友

達がたまたま近所に住んでまして、彼は大学は違うんですが、二人で一緒に安酒飲んでるうちに、「オイ、どっか行かぬえか」って話になりました、「よし、じや、どっか行く為には金ためよう」と、二人で勝手な事しながら金をためたんですけれども、前の年の十月か十一月頃に、「じや、東南アジアに行こう」ということで、あらたまって目的を持って行くっていうんじやなくて、簡単に言えば行ってみよう、ある意味ではヒッチハイクみたいのが学生の間ではやっていた時代なんです。ナホトカ航路で、ソ連へ渡って、それからヨーロッパ行くっていうようなものが、学生の間で流行っていた時代だったんです。で、寒いところはいやだから、あつたかいところに行こうと、それで東南アジアへ行っただんです。

司 会Ⅱそうですか。で、タイに行かれて、どんな風にしてお会いしたんですか？

伊達木Ⅱあの一、非常に不思議なご縁だと思ってるんですが、関西汽船の安い船、貨物船の、三千トンぐら

いの船に、とにかくタイまで乗せてくれつといいまして、乗せてもらったんです。バンコック着きまして、さあ、どこへ行こうか、別にあても何も無い訳です。最悪の場合YMCAでも、どっか捜せばいいやっというようなつもりで、とりあえず三日間だけは一緒にいようと、それからあとはお互いバラバラになって三ヶ月、四ヶ月後ぐらいにどっかで会おうっていう約束で出かけたんです。たまたま、埠頭へ降りましたら、バス停がいくつか並んでいるですよ。その中で一番ライオンが長そうなのに乗ってみようというんで、ふたりで乗りましてバンコックを横切って一番長いのに乗ろう。といって、とにかくトンブリまで行っちゃった訳です。方 丈Ⅱそれが、寺の入口の終点なんです。

司 会Ⅱああ、そう(笑)

伊達木Ⅱええ、そこへ行った訳ですよ。二人で……もう夕闇でかなり薄暗い時期でしたように記憶してますけども、で、降りて、いくつかが寺がありますんで、ブラブラまわってた訳なんです。来たばかりで何もわか



らないで……たまたまどっかの寺をまわった時に小さい子供が来まして、「お前、日本人か」っていうんです。「そうだ」っていつてましたら、「佐々木っていうの知ってるか」っていうんですね、「お前、どこだ」っていうから「東京だ」っていいましたら、「佐々木っていうの知ってるはずだ」っていうんです。「いや知らない」って……よく聞いてみたら、この辺に佐々木っていう人がいて、とにかくお前、会いに行けっていうことなんですよ。それで、別に行くあてもないもんですから、じゃ、行ってみようや」っていうんで行ってみたのが、黒田さんのいらした、ワットパグナムなんです。

司 会||ほう。で、その佐々木さんっておったんですか？

方 丈||当時はですね、日本人では佐々木さんって方一人いたんです。この方は高野山の関係でおいでになって、日本人の納骨堂があるんですが……

司 会||ワット・リアップ？

方 丈||そう。リアップ。その、納骨堂の日本人の関係の法要などをお一人で受け持っておったんですが、たまたま縁があつてそこからパグナムへ、パリ語の勉強においてになったんですね。私たちはそれでお世話になったんです。で、パグナムがいま有名なのは、副住職がですね、アーチャン、アーチャンっていうのは先生っていう意味なんです、その副住職が、二世なんです。ね。(お父さんが日本人で、お母さんがタ



イ人) 非常に優秀なお方で、日本語ができる方はいまタイ国の高僧、名僧の中で、完全に近い日本語を話せる方は一人しかいないわけです。今日、パグナムが、特に日本と縁があるのはそういう事なんです。われわれも佐々木先生も、河北先生がおられるんで頼っておられたりして、われわれもそんな関係でパグナムで世話をしていたのです。

司 会||それで?パグナムのお寺に行かれた訳ですね?

伊達木||ええ、そうです。

方 丈||それでね、最初に会ったのは佐々木先生のことなんだけど、まあ僕たちの部屋に佐々木先生がいるところに訪ねて来たんです。それでね、「何しに来た」っていったら、「別にアテなく来た」っていうんですね。どこに行くのかというと、決まっていなくて、「じゃ、寺に泊ればタダですむからそうしろ」と。そのうち、二・三日してどうせいるなら坊さんになつてはどうか、どこでも乗り物はタダになるしと言って、

勧めた訳です。二人ともそれじやっていうんで、サマネンっていうお小僧さんになった。簡単に言えば五つの戒律を守ればいいですがね、その、小僧さんになつて、私たちのあとを毎日くっついて歩いて、チエンマイに行つたりして、あれで一カ月以上いたんだね。そんなご縁で毎朝托鉢にくっついてたりして。

伊達木||友達と一緒に رفتたんですけど、友達の方はさすがに、「オラア、やめた」って言うんでやりませんでしたけど、僕は何だか気が向いたつていいいますかね。

方 丈||で、石附さんのあとくっついてたり、私のあとくっついてたりして、両方のあとくっついて……。

司 会||五つの戒律って何々ですか?

方 丈||第一不殺生、第二不偷盜、第三不貧姪、第四不妄語、第五不飲酒と。あとは、第六不説過戒、不自讚毀他戒はいんですが、その次はお化粧しないとか、観劇をしないとか、一尺以上の高さのところには乗っちゃいけないとか、いろいろあるんですが、大事なこ

とは、根本的には五戒を守ればいいんです。

司 会Ⅱで、托鉢の時なんか一緒に歩いて行くんですか。

方 丈Ⅱそうですね。托鉢の時はあとにくっついて行く訳なんです。いわゆる応量器の中にいろいろ、バナナやご飯や、たまごなどを頂戴するんですが、水ものも貰う場合、日本でいえばお味噌汁のようなものですか、煮たものですね、そういうものを貰うのに、もうひとつ、重箱にひもがついてる、棒がついてるようなお重があるんですね、そこにひとつづつ貰うんで、それを持っていただいたり……。

伊達木Ⅱハイ、持たしてもらいました。

方 丈Ⅱそれで、托鉢と一緒にできるんですよ、補助的な事をですね。一緒にやってもらっていた訳です。

そんな事だったネ、

伊達木Ⅱそうですね。運搬係みたいな感じがなきにもあらずでしたけど。

司 会Ⅱきつと面白い話があるんだろうと思いますけ

れども。

伊達木Ⅱそうですねえ。

方 丈Ⅱ伊達木さんは愉快な人でしたから、思い出はホントにたくさんね。何ていっても全然何も知らない人がお坊さんになりましたから、非常に面白い事だし



小谷氏より供養を受ける黒田方丈

た……。

伊達木Ⅱ自分自身でも、まさか向こうでそういう、正式のお坊さんではありませんけども、そういう形になるとは思ってもいませんでしたしね。私の母方の方にちよつとそういう親類がいるんで、そういう事がどっかで心の中にあつたんじゃないかなんて気はしますけどね。だから一ヶ月半、二ヶ月近くいたと記憶していただけますけどね。

方 丈Ⅱ何といつても魅力なのは伊達木先生がいられたつていう事、タダでいられたつていう事だね、（一同笑い）

伊達木Ⅱそうですね（笑）ですからバイトで一生涯けん命ためて、さき程、五〇万つて話出ましたけど、私はその期間五ヶ月ぐらい東南アジアまわりましたけれども、全部で二十万ぐらいで……。もともと、いわゆる乞食旅行やろうつてというのが趣旨でしたし、木綿のセーラーバッグひとつで、全てを持って歩いていましたから、お金もかかりませんでした。

司 会Ⅱチェンマイまでも行かれたと……

方 丈Ⅱええ。チェンマイに行つたんです。佐々木先生と石附先生と私と、伊達木さんと、それから福田さんと一緒にチェンマイにですね。

伊達木Ⅱ確かね、私の記憶ですと、ちようど二人いいのが来た。この機会に、この二人がいるとお金を扱うとか何とかという役に立つし、また、前から行きたかつたし、ちようどいいから行こうというような事でした。話がまとまつたような記憶してます。



ワット・エメラルド(王宮寺院)にて

司 会|| ああ、そうですね。

方 丈|| それですね。チェンマイに行った時は、バンコックの駅を午後の四時ぐらいの列車に乗りましてね。朝着くんです。

伊達木|| そうですねえ。

方 丈|| 十何時間かかりましてね、それでネ、公園のベンチのような二等列車ですから。金がなくて……。

司 会|| それは、タダですか？

方 丈|| いや、それはタダじゃないんです。お坊さんは半額なんですよ。バスは全部タダなんです。列車は半額なんですがねえ。公園のベンチみたいな座って夜中じゆう走って行っただけです、朝着いた時には顔はもうほこりだらけです。窓がないんですから。エライ旅行でした。今やれていわれてもちよつとできないけれども、とにかく金がなかったからですね、チェンマイに行って、あと、チェンマイ中托鉢しながらお寺に泊めていただいたり、托鉢したりして、ほとんど金なしにチェンマイのお寺をお参りして、泊めてもら

いました。お寺も、その時は安居じゃありませんでしたから、自由に旅行できますんで、パグナムの方のご住職の紹介状をもらってね、それで、非常にお寺で優遇を受けた記憶がありますねえ。

司 会|| そうですか。

方 丈|| 伊達木先生は観光ビザで来たから、二週間おきぐらいに国境を越えてイクステンション（期間延長申請）に行ったように思います。

伊達木|| そうです。

方 丈|| サマネンのかっこうしてねえ。お坊さんなら多少悪いことしても通っちゃうもんですから、それでビザの書き替えにね、福田さんと二人で……。今のラオスに行つてね、それで書き替えて……。

司 会|| どうしてラオスに行くんですか？

方 丈|| 一度国をね、

伊達木|| 外に出ないと、

方 丈|| 観光ビザですと二週間ですから、それ以上になると一ぺん外へ出て、もう一度入ってきて書き替え

ないと……。

司 会 II ああ、そうですか。

伊達木 II 新規に入ったという形をとらなきゃいけないんで。

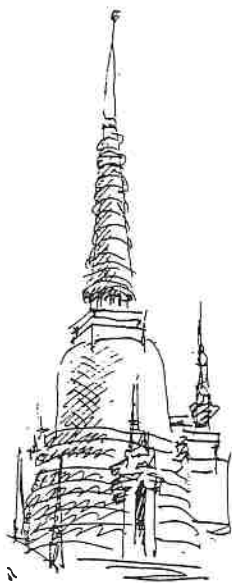
司 会 II それでラオスに行かれた。

方 丈・伊達木 II ハア。

司 会 II なかなか面白いですねえ。

伊達木 II だからチエンマイとかいろいろ行きたいっていう希望は持ってたんですけども、只、お坊さんをやつてなければとでも行けなかっただろうと思つてます。ふつうの観光ルートをまわるといふ形だったろうと思いますね。それがたまたまそういう事で、お伴をしながらまわられたつていうのは、随分、いい経験になりました。

方 丈 II 何ていつても、お坊さんつていう仕事は素晴らしいつていうか、お金がなくても生きられるつていうね、これはもうとてつもない素晴らしい事だと思つてますねえ。



司 会 II この通り型破りの方丈ですから、向こうでも随分型破りの事をやつたんじゃないかと思うんですが。伊達木 II そういった感じは僕も随分。そうですね、もう十何年振りに、数年前にお会いしましたけれども昔と何も変わつてらつしやんないなあつて感じを受けて、そういう意味じゃ、心安まる感じがしますけれども、昔からこんな感じだつたと記憶してますね。

〃 オイ、伊達木君ちよつとこいヨ。これやれヨ〃なんて

不、随分、こき使われた記憶がありますけど…(笑)。

向こうのお寺にお世話になつてゐる時も、はじめお寺で…バグナムでお世話になつて、実際坊さん、あの得度したのは十日以上たつてゐると思うんですけど、一週間ぐらいたつて、どうだ坊主にならねえかつて話になりまして、それまでは毎日朝からふき掃除やらされましてね。

司 会||そのサマネンになる前ですか？

伊達木||ハイ。なる前。どうせ夕ダでお前ら寝てるんだからお掃除ぐらいしろなんてこき使われました。

司 会||サマネンになる時は全部剃髪をして…。

伊達木||ハイ。剃髪をしました。

司 会||で五戒でもきちつと戒法を受けるんですね。

方 丈||そうそう。

司 会||得度式ですか、簡単な。

方 丈||そう。ホントに簡単な。

伊達木||それは佐々木先生にやっていただいて。

方 丈||そうそう、それは高僧、名僧、住職、副住職

ではなくて、その資格がある人ならかまわないんです。あれは副住職にやっていただいたように思いますよ。伊達木||そうです。なつてから…。実質は佐々木さんにやっていただきましたけれど。

司 会||それで、還俗する場合もまた、同じように。伊達木||ハイ。非常に簡単に還俗できたような…。もともとなりたくてやつた訳じゃないもんですから、途中かなり遊んでたことの方が、あちこち動きまわつた事の方が記憶に残っています。

### 何が一番つらいか

司 会||向こうのお坊さんは二二七の戒律を守つてゐるわけですが、一番つらいのは何ですか？

方 丈||私の解釈ですがこの二二七を要約すると、食べ物に関する事、異性に関する事、それから経済的なものという風な事に簡単に分けられると思うんですけど、分け方はいろいろあつて、二二七を分けてるんですけど、一番なんといつても大変な事は食べ物のこと

です。……。經典にありますように、午後太陽が傾くと食事をしないと……今でもそれを守っていますから。朝の托鉢は陽が出て、手のひらのスジが見えるような時に托鉢に行って、一時間ぐらい、ピンターバーっていつてずつと歩いていくと供養を受けてそれを持ってきてディックっていう小僧さんが誰かが食べ物をきれいにして食べられるように出してくれる。それを食べて、お昼はふつうはその残り物を食べる訳です。……。……。……。十二時過ぎると飲み物は差しかえないんです。コーラとかジュースは差しかえありませんけど、固形物は食べないんです。ただ、チーズは一応食べ物じゃないっていうような扱いを今はしています。私の場合はチーズも食べませんでしたから二食で。一番つらいっていうのは慣れるまでは二食で午後食べないこと。しかしこれは慣れてしまえば全然問題ないと。これがひとつですね。それからひとつ、異性に近づかないと。これは女性を不浄なもの、これは言葉が悪いんですがそういうふうな解釈をして



アユティア(山田長政墓参のあと)にて

いますから、女性のそばへ行かない。女性も衣にも触れたらやつぱり罪悪になる、地獄におちるといような感じがありますから、絶対にお坊さんのそばにはこない。というような事で、異性に近づかないと。結婚したいとか、恋人とかフィアンセがいるっていうときはお坊さんをやめてしまえばよい。永遠にやっているとプロのように、ずつとお坊さんで通す以外は結婚したければ自由にそういうふうな事ができますから、





ワット・アルン(暁の寺)

やめてしまえばいいんです。それからあとは、お金ですが、これは、サンネマンのお小僧さんかディックっていつて世話をする少年にたのめばですね、手紙を出すとか、何か欲しいものがある時は、引き出しの中にお金を入れてあるっていうような事で、お金に手をふれないで生活できますんで、一番大変だったというのはやっぱり、食べ物朝と昼ですから、これさえ慣れればですね、あとの事は、私は、それほど苦にならないとふんでおります。戒律に関してはいろいろな事がありますが、要するに、やる気があるかないかによつてですね、いろいろ結果的に違ってくるような感じを受けますが。

司 会 日本のお僧堂のように、指導者がビシビシやらせるっていうような事はないんでしょうねえ。

方 丈 全然ないですね。あちらは本当に、いわゆる上座部の仏教は自分がどうするかで決まってくるんです。日本の場合には形の中に入って、その形をブチ破った時に素晴らしい僧侶になるんですが、向こうは自由

の、本当の自由の中の修行をどういうふうに置くかについて、その辺でちがって来ると思うんですが。

司 会Ⅱそれからね私、得度式を見せてもらった事があるんですが、あの戒師がですね、得度式の最中タバコを吸ったり、タン壺にタンを吐いたりね、儀式、セレモニーに対する感覚は、日本人とはだいぶ違うような気がするんですが。

方 丈Ⅱ国民性だと思っんです。国民性っていうか、いわゆる上座部の仏教それ自身が、何かやっぱり日本の僧堂のようなものを求めていないところにあると思うんです。もうひとつ、暑い国ですから。インドで仏教がすたれたのには氣候の問題があると思うんですね、あまりにも暑すぎる。そうするとピチツと日本の僧堂のように形の中に生きて行くという事はなかなかできな。日本人は何故できるかっていうと、四季、氣候に非常に恵まれている。国民性が几帳面だからできるってというような感じがします。

司 会Ⅱそうですね。

方 丈Ⅱあととはですね、よしあしとなるとこれはいろいろな点でどっちがいいというような事を申し上げる事はむずかしいんですけども、タイには、現在のような形は尊ぶべきものであるし、また、何百年もの伝統のあるものは大事にしなくちゃならないけども、ただそれを本当にどういうふうにとらえてゆくかという事、<sup>まよ</sup>行じて行くかという事が大事な問題であると思うんです。ですから今タイで大きく問題となっている事は、去年のところで、成田君が帰ってきたところの話によると、得度をするお坊さんが五十%を割ったついでなんです。今までは、どこのお寺で、どなたについてお坊さんになったかというのが世の中の出世のキツプだった訳ですね。それがこのところ大いに変わってきたついでというのはヨーロッパあたりに行つて勉強してきた人たちは、ヨーロッパ的な物の考えで、仏教そのものを、いわゆる仏の、仏陀の教えて、慈悲によつて人間が救われてゆくついでというような考えじゃなしに、物質的な面が非常に強くなつてきて、今後の若い方が

いろいろ変わる事があるんで、どんなふうにして行くかっていうのが、今後のタイの高僧の方々や名僧の方々の大きな課題だと思えます。

二二七の戒律を守ってほしいというだけでは、高度の文化が発達したところに非常にむずかしくなってくるというのが、タイに関するひとつの不安がありますね。

司 会〓そうですね。伊達木さん。サマネンとして割合自由な立場でね、タイの仏教をご覧になって、いままた新聞記者としてご活躍な訳なんですけど、タイの仏教にどんな感想をお持ちでございますか？

伊達木〓そうですね。なったひとつの理由っていうのも、せっかく学生の時に自由にこれるんだから、要するに中から見たい、単なるサイトシーイングで観光で見ると違ってね、中から見てみたいっていうのがひとつの動機でもあるんですが、やっぱり、私が知っている日本の仏教と、タイの仏教とはいろんな意味で違っているし、お坊さんの修行の仕方も違っていると当

時感じていましたね。ひとつは、いま方丈さんからも話がありましたけど、当時やっぱり生活の中に仏教が完全に溶け込んでいると思えました。お寺にいても、地域の人たちがお寺に来て、ある一時期を過ぎたり、いろいろなお話をしたりという、ある意味でお寺からみるとうらやましいっていうんですかね、国民の生活の中に仏教が伝統的に息づいているという形のもの。日本もかつてはそうでなかったんでないかなっていう気持ちで非常に受けた記憶があります。

### タイで得たもの

司 会〓方丈さん、タイに行かれました一番大きな収穫って何でございましたか？

方 丈〓やっぱりですね、宗教家として戒律はですね。守るべきものはどんな事をしてもし守らないと宗教のいのちはなくなるといふ事を、これは私いままでかって学んだ最大の収穫だと、それでなかったら、釈尊の教えってというのはこれは、成り立たない。守るべきもの



タイの葬儀に参列

はいのちをかけても守って後世に伝えて行くと、そういう、大誓願を立てないと、宗教というか、特に釈尊の教えが永遠に続くというのには、僧侶が自覚をして、本当の釈尊の教えは何かと、いうところのものを腹に納めなくちゃならないなと気がついた事が、私のタイで修行した最大の収穫であったんじゃないかと思うんですねえ。

司 会||そこから宗祖を通して釈尊に還れという考えが出たんですか？

方 丈||そうですね。私はね、何といっても日本の場合は宗派の仏教でありますから、これを否定することはできないんで、それを通して、どうしても本当のものを生かしていくというのがわれわれ宗教家の使命であるというような事をタイで、戒律を守って生活生活をさせていただいた中で、何かもうそれ以外にないなあと感じたんですねえ。

司 会||そうしてお考えの十五年間の蓄積が今度の留学僧派遣という大誓願を实地にうつすご活動になられ

た訳ですね。

方 丈Ⅱ結局、僕がですね、タイに安居させてもらい、それからアメリカにも行かせてもらって、何というてもとにかく日本の場合には島国で、多くの海外の人と接する事がないから唯我独尊的なところがある訳ですね。でも一步世界に出ますと、心が大きくなければ、一升の枡には一升しか入りませんけどこつちに一斗の器があれば一斗のものが入ると。それを理解するにはどうしても語学をですね、その国の語学ができなければダメだと。しかし、ありとあらゆる言葉はできません。われわれには一人で十カ国もの言葉ができる事はこれはもう希でありますから、せめて言葉が充分じゃなくても、その国の人たちが何を考えているか、何を望んでいるかという、相手の国の事がわからなければこちらの事もわからないという事で、どうしても、日本だけにいたんではもう仏教は本物は生かす事はできないというような事で、どんどん世界に出て、世界を学んで、そしてその中で日本の仏教の素晴らしさ、釈尊の教

えの素晴らしさを大いに世界に広め、なおかつ、世界の人人々と共に生きてゆくっていうんじゃないと、日本の将来はあり得ないと、いうところに私の、海外に若い修行僧を出すというひとつの目標というかあるように僕は解釈をしています。

司 会Ⅱそうですね。さいわいタイに派遣する二名の留学僧が決まったんです。十五年間にして理想の第一歩が実現されたという事で大変おめでとうございます。伊達木Ⅱそれは、おめでとうございます。

方 丈Ⅱみなさんのおかげです。日本人の中には、小乗と言って上座部仏教を軽蔑している人がおられますが、私は、上座部仏教が尊いという事じゃなしに、どう生きなくちゃならないかという事を学んでもらおうと思っております。それについて、アメリカにも行ってもらうて、アメリカの新しい仏教の息吹きというか、禅のよなものをおアメリカ人がアメリカ人なりに解釈している、そういう人たちに大いに接してもらって、勉強してもらおう。



座談会終了後

伝統の中のイギリスの人々、フランスの人々に接し、芸術の都のイタリアにも行ってもらって、本当に世界中の人が何を願っているのかという事を仏教を通して勉強していただかなくちゃいけないナと、こう思っているんです。世界はひとつだというようなところにまで話をすすめ、実現してゆきたいという願いを持っている訳であります。

司 会 会 成功をお祈りします。

一 同 同 ありがとうございます。

(善光寺に於て収録)

# 不動明王大祭

五月二十八日

五月二十八日（火）、恒例の不動明王大祭が行な

われた。善光寺の行事はいつも天気にも恵まれる。この日も、予報では午后雨となっていたが、終日雨なく、曇りがちだったがだけに、暑くもなく、落着いた法要日和だった。

十一時十五分から四十分間、「お不動様と現世利益」について佐藤俊明老師の法話があり、善光寺がゼロから出発してわずか十五年にして横浜屈指の名刹となった驚異的な発展はまさにお不動様の御利益であり、方丈様がお不動様の思召しを体して教化活動に精進された賜物である。檀信徒の皆さんも、お不動様の思召しに添った生活にはげみ、御利益を頂戴していただきたい、

と、結んだ。

ついで十二時から大般若経を勧請して、第二回の大般若転読法要がおこなわれた。導師は佐藤俊明老師で、法要開始にあたって唱えられた香語は次頁のとおりである。

法要後、方丈様から、お不動様を勧請した経偉や頂戴した利益について、尊い体験を通してのお話があり、参列者に多大の感銘を与えた。

なお、この時の法話は、特別号の「法話集」に掲載の予定です。



不動殿にて法要



お集りの檀家の方々



不動明王大祭

大般若会香語

十方無罣礙

放廣大靈光

般若威神力

万難成吉祥

恭惟、山門此日、身代不動明王大祭之会辰

茲供養六和敬之淨侶

奉転讀六百軸之金文

覺薩埵波倫極信心

仰廣大般若功德力

所集鴻福 回向

般若十六会之一切三宝

極安樂世界等之十方三宝

十方罣礙なく

広大の靈光を放つ

般若の威神力

万難を吉祥と成す

恭しく惟れば、山門此日、身代不動明王大祭の令辰

茲に六和敬の淨侶を供養し

六百軸の金文を転讀し奉る

薩埵波倫の極信心を覺し

広大般若の功德力を仰ぐ

集むるところの鴻福は

般若十六会の一切三宝

極安樂世界等の十方三宝

身代不動明王、日限不動明王

聖觀世音菩薩、藥師如來

甲子大黒尊天

專祈

天地清明 風雨順調 國家安寧

世界和順 万世太平

又祈

山門鎮靜 火盜潜消 清衆安穩

法輪彌輪

更祈

当寺大小檀越 十方信心施主

並大般若勸請施主各々家内安全

子孫長久 諸難消滅 心願成就

諸縁如意吉祥

至禱至禱

身代不動明王、日限不動明王、

聖觀世音菩薩、藥師如來、

甲子大黒尊天に回向す

専ら祈る

天地清明 風雨順調 國家安寧

世界和順 万世太平ならんことを

また祈る

山門鎮靜 火盜潜消 清衆安穩

法輪いよいよ輪せんことを

さらに祈る

当寺大小の檀越、十方信心の施主

並びに大般若勸請の施主各々家内安全

子孫長久、諸難消滅、心願成就

諸縁如意吉祥

至禱至禱

# 善光寺海外留学僧派遣 育英会基金勸募趣意書

經濟の高度成長を目指して異常な努力を傾注した結果、物質的には予想以上の繁栄がもたらされましたが、反面心の貧困を招き、いまにして遅ればせながら心をもとめはじめたのが今日の世相であります。

「心の時代」という言葉や文字がよく使われる昨今ですが、私どもの祖先の心を培かってきた古い仏教を新しく見直すことが心の繁栄を招来する至近最良の道であります。

ところが残念ながら今日の日本仏教界は、時代の進展に即応して教化の実を挙げる力に欠けており、ここに拙僧が留学僧を海外に派遣して人材養成を

はかるゆえんも存するのであります。

さいわいにして過日二名の有為な人材をタイ国に派遣いたし、善光寺の海外留学僧派遣はいまや全国的に注目を浴び、高く評価を受けております。第二年度目の来年はアメリカ禅センターに派遣すべく準備を進めておりますが、前途洋々たるものを感じ、渾身の力をいたす所存であります。

有難いことに別記の方々から、全く自発的に浄財をお寄せいただき、激励を受け、かつ「基金を勸募しては」との御助言を頂戴いたしました。ここに再思三考のうえ、善光寺海外留学僧派遣育英会基金の勸募をお願い申上げる

次第であります。

何卒、拙僧の意のあるところをお汲み取りください、この大事業完遂のため、格段の御協力御支援をお寄せくださいますようお願いいたします。 合掌

昭和六十年五月吉日

成寿山善光寺住職 黒田大圓

## 寄附者名簿

(申し込み順)

黒田武志(大圓)	五千万円
榊ナリス化粧品	五百万円
東郷 敏	五万円
星野 浩	十万円
越石 周平	五十万円
金田 親男	十万円
中村 正信	十万円
黒田 能勝	三万円
越石ゆきゑ	五十万円
(有)越石商店	二十五万円

尚、基金は一億円を予定しています



# ZEN MOUNTAIN CENTER OF NEW YORK

Box 197, Mt. Tremper, New York 12457 (914) 688-2228

Doshinji Monastery  
Zen Arts Center, Inc.  
Right Livelihood, Inc.  
Kumada Institute, Inc.

April 5, 1985

Dear Reverend Kuroda:

This is to confirm a recent conversation with Reverend Taizan Maezumi concerning the visit to the United States of three scholarship Japanese monks that you are sponsoring.

We would welcome the opportunity to host their visit at the ZEN MOUNTAIN CENTER for three or four or more months as may be required. We will provide room and board and training opportunities. The monks would participate in our daily schedule and have access to all privileges as are due regular Sangha members.

We feel that the visit not only provides a wonderful training opportunity for the visiting monks, but also for our own Sangha. We look forward to being able to cooperate with you in making this event possible.

If there is any further information you may require, please do not hesitate to let me know.

Sincerely yours,

ZEN MOUNTAIN CENTER OF NEW YORK  
Doshinji Monastery

Reverend John Daido Loori  
Vice Abbot

JDL/sek

cc: Rev. Taizan Maezumi Roshi  
ZEN CENTER OF LOS ANGELES

## ロス・禅センターよりの招聘状

謹啓 黒田方丈様

過日、当育英会より三名の日本人留学僧をアメリカに派遣なさる件につき、前角老師と協議した結果をご報告いたします。

当ゼン・マウンティン・センターに、三、四カ月間、或いはそれ以上、ご要望に応じて滞在なさることを、私どもは心から歓迎いたします。食事もお教屋も修行できる態勢となっており、留学僧は道場の規矩にのっとりて大衆一如の生活に入ることができま

す。私どもも思いまするに、当道場で修行なさることは、留学僧にとってたいへん貴重な体験となることでしょうし、それは私どもについても同じことでもあります。

方丈様のご尽力により、この企画が実現することを望んでやみません。もし連絡事項がございましたら、遠慮なくおっしゃってください。謹白

四月五日

ニューヨーク・ゼン・マウンティン・センター

道心寺僧堂監 ジョン・ダイド・ルーリ

# タイ留学僧からの現地報告

## タイ僧伽へ加入するまで

田中 智誠



立命館大学経営学部卒業。  
宇治黄檗山禪堂に掛錫、後滋  
賀県正瑞寺に入寺。  
昭和24年鳥取県生まれ。

タイサンガに仲間入りさせてもらうには、しかるべき手順をふみ、社会的伝統行事の一つである得度式を経て可能となることです。

バンコック到着から得度式にいたるまでの経過を簡単にまとめてみました。

四月十八日

夕刻成田を発って、予定通りドン・ムアン空港に夜中着きました。空港へはWFB（世界仏教徒連盟）の名譽事務局次長の小谷亀太郎氏の出迎えをうけ、ワット・パクナムの僧院まで案内してもらいました。（ワット・パクナムはバンコック中心街より南西郊外トンブリ地区にかる。）

私達の起居するクテイ（僧房）は広大な境内の中の西端にあり、クロン（水路）沿いの三階建てのもので、割りあてられた部屋は東向きですので午前中は少し陽がさします。こちらは夏の盛りですから日中暑いのは当然ですが、夜間も寝汗をかくほど都交寝苦しいです。手や腕の表面がアセモだらけとなり、これから先どうなることやらと案じられました。

四月二十二日

ワット・パクナムでの四日目の朝、粥座（托鉢に出る比丘以外は朝六時より食堂にて四人一座となっていた）へ赴く途中、当寺院副住職の一人、プラ・パーワナコーンソーラー師に呼びとめられました。粥座・朝課後、居室に伺いますとパーリ語の僧名をつけるのに生年月日と曜日を聞かれました。その時、ウパサンパタ（得度式）は五月一日と知らされました。日本出発前に得度式は五月中旬の満月の頃と聞いておりましたので、当初の心づもりより二週間も早くなつたわけです。タイ僧伽で六ヶ月間の僧生活を体験さ

れた「タイの僧院にて」の著者青木保氏においてさえパーリ経文や問答型式の暗誦には三週間かかったとのこと。はたして一週間やそこいらで四十分相当のパーリ経文を憶えきれるであろうか、大いに心配になってきました。気はあせれどもパーリ経文の暗誦はサツパリすすまない。時間是非常にも刻々過ぎていく……。

出発前から食事のことも気にかかっていましたが、夕食の量を徐々に減らし固形物をとらないよう努力は払ってきました。同じ階で新参比丘の指導的立場の古参比丘サクン老僧より、得度式までの間、「夕食を用意してもよいがどうか？」と聞かれましたが、遅かれ早かれと思いい十九日から非時食戒を随守いたしました。

四月二十三日

昨年お世話になったヴィトウーン氏を花市場があるテーウエート近くのオフィスにたずね、一年ぶりの再会を喜びました。帰りは寺までヴィトウーン氏の車で送ってもらいました。クテイの天井にさがっているプロペラみたいな扇風機が故障しているのを見て、「こ



得度式の法衣の供養者

れではお困りでしょう。私に修理代を喜捨させて下さい。とおっしゃられ、早速サコン老僧とボゴをはじめられました。そして当座用にと普通の扇風機をトンボ返りで持ってこられました。ヴィトワトンのこの態

度（タイではこのような行為をタン・ブンと呼ぶ）にはまったくお礼の言葉も見いだせず、ただ感謝の念に頭がさがりました。（偏見かもしれませんが、大体タイ・ビルマでは、電気設備や装置などたんに据付けしたままで、日頃のメンテナンスやトラブル・シューティングがまったくなされてないようです。）現在、天井の四段変速扇風機（日本の地下鉄等にあるのと同じ）は修理され立派に作動しております。

四月二十四日

九時より約一時間、副住職を戒師として現地タイ人の得度式があり参観する。

四月二十七日

晚八時から九時半までピッチャイ師よりパーリ語の発音その他について指導を受ける。

四月二十九日

粥座・朝課後、ピッチャイ師よりパーリ語僧名を覚えてもらいました。私は「ウロラタノー」だそうです。何か、自分がいつもウロウロしているからついた僧名

のような気がしました。パリー語は意味は、ウロ(胸)十ラタナ(宝石)からできているそうです。

五月一日

午前中は最後のパリー経文暗誦に取りくむ。暑さで朦朧とするなか、難行苦行のすえ到頭くるべきところまできました。言うならば、まさに百尺竿頭に一步を進めることが出来るや否や!というところです。

齋座後(食)、日本から持参したカミソリで梅田師を剃髪し、私はいつもどおり自分でやりました。午後二時には木村師が来てくれました。カメラマン役は当時逗留中の瞑想行者である中尾青年に頼みました。三時、布薩堂(本堂)そばのお堂で白衣に着がえてますと、小谷御夫妻もお見えになり、ダーヤカ(施主、普通は両親がなる)役のアカポンさん一家ともその時初めてお会いし、出家前でないと出来ない挨拶をかわし土産を渡しました。アカポンさんは家電製品を扱っておられる方で、日頃から三宝への帰依あつく機会あればぜひお世話したいと住職に申しこんでおられたそうです。

アカポンさんの行為(私ども日本人二人分の得度式の費用負担)はタン・ブン(欧米ではメリット・メーキングというタームで紹介されている。)と呼ばれています。他にどのようなものがあるかといえ、

。自分自身に在家戒(五戒・八戒)を課し遵守すること。

。出家すること。

。比丘・僧院への寄進。

。親類縁者間やコミュニティ内での寄進。

等々です。

一般的にサン・ブンといえ、僧院ならびに比丘への財施であり、それは「積徳」と言うよりも「徳の獲得行為」として今生におけるカンマ(業)の向上を計る目的で行なわれるようです。「不徳を為すことによつて生ずる対立観念を相殺せんがための積極的意味あいがタン・ブンにはこめられているのかもしれない。さて、得度式はまず十五分位前に、友人・知人が少なかつたため白衣のメチーさん(寺で八戒を守り奉仕





法衣の供養を受ける

活動をされる女性信者をメチーと呼ぶ。二十人位を頼んで僧衆へのお供物を持って先導してもらい、その次を施主・知人が戒師・知人が戒師・羯磨・教授へのお供物をささげ、最後に我々が蓮華を献げもつてウボサタ（布薩堂＝本堂）の周囲を三回右まわりして三宝帰依を表します。この際ドラ・タイコなどの鳴物入りで踊りながら回る場合もあります。九つある霊的礎石の一つで本堂正面にある結界標石＝戒壇（シーマーと言って、これがあるワットだけが得度式ができる。）の前で献香・献華・点燭し跪坐三拝、起身起立合掌して唱文そして一拝三拝唱文を繰り返して本堂へ入り、又同じような動作がはじまります。戒子の姿勢は起身合掌、跪坐合掌（跪いて踵を立てる）に、本堂内での進退は胡跪（長跪）が基本となります。三拝は跪坐合掌の状態での三拝です。両腕とも肘から指先まで完全に地面につけ、掌は地面に伏せます。したがって、両膝・両手に額で五体投地というわけです。

本堂内では、二十数名の僧伽を前にして出家を乞い、

寿桃



アンタラワーサコー（腰巻）、ウツタラーサンコー（黄衣）それにサンカーテイ（黄衣を折りたたんだもの）、いわゆる三衣を授与されます。次に三帛と戒を乞い、それを授与されると次は十戒です。ここでやたら長い文句があり少々つかえてしまいました。次にニッサヤム（所依・依止）を乞い、パツタン（＝バアツ・鉢）をいただきます。次に十三項目の間障碍法。具足戒授与の請願。羯磨・教授による羯磨文の表白誦出等がつづきます。以上のような式次第はラーマ四世（モンクート王）の皇子ワチラヤン親王（ワチラナーナワローラサ）によって一九一六年に改訂されたものが今日行なわれている得度式の土台となっているそうです。

得度式のなかで、私が最も興味深く感じたことは、功德水を使って出家受戒得度によってもたらされる功德を先亡霊位も含めすべての存在、すなわち普く一切に及ぼし回向するということです。その合図として金属の水瓶に入った水を別の器（黄檗の瑜伽焰口（大施

餓餽<sup>イタク</sup>）で使用する酒水器<sup>スイスイ</sup>と同じもの。）に移注し、その功德を先亡霊位、両親・親族一同にふりむける、回向するという象徴的儀式として最後を飾るにふさわしいものでした。そのあと新比丘は親族等から生活用品等のお供物を献じられて式終了となります。結局この日の得度式は一時間半位かかりました。普段の勤行で合掌していると自然と力がぬけて合掌の姿がくずれれるものですが、そういうこともありませんでした。禅定と三密のはたらきによってと言わべきなのでしょうが、お蔭さまでタイ僧伽入りは成就いたしました。精一杯に取りくみ、成りきったところに仏弟子として勝縁をいただいた姿があるのではないのでしょうか。もちろん今回は私の身内や知人は式に参観しておりませんが、その場におられた関係各位の方は一様に随喜していただいたと信ずるものであります。



堂前で点燭

## 得度式を了えて

梅田 尚平



佛教大学文学部佛教学科卒業  
総本山知恩院に於て伝宗・伝  
戒道場成満。  
昭和38年熊本県生まれ。

四月十八日夕刻、私は田中智誠師と共に黒田理事長のお見送りをうけ、成田空港から一路タイのバンコクへと、テラヴァーダ仏教の僧修行に向けて飛びたった。

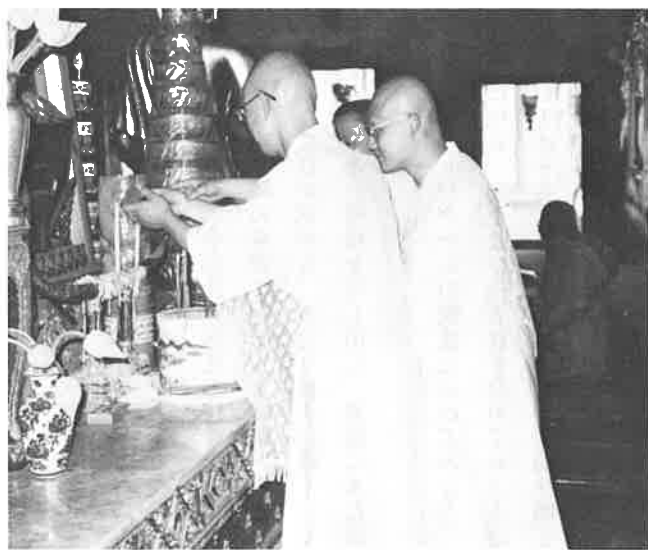
現地時間の午後九時五十五分、ドンムアン空港に着、私はタラップを降りながらこの国の熱気とバンコ

クの匂いに一種の興奮を覚えた。夜分にもかかわらず、世界仏教徒連盟事務次長の小谷亀太郎氏にお出迎えていただいた。ワットパクナムについた時はすでに十二時をまわり、しんと静まりかえっていた。プラスム師に室へ家内され、小谷氏にお礼と挨拶をして就寝。

翌朝午前五時、隣の庫裡に起居する沙弥、優婆夷達の水浴びの音で目が覚める。あたりはまだ暗く、しばらくして太陽が赤い屋根を写し出し、異国に來た実感を味わった。

ここでワットパクナムの概要にふれてみよう。この寺院には現在、僧侶及び信者達を含めておよそ百名近い人々が生活を共にしている。この寺の前住職で中興の祖と呼ばれているチャオクン・モンコン・テープムニー師に対する地元の人達及び信者の信奉は、師の死後二十七年を経過した今日においても絶大なものがある。この寺院は観光寺院の一つとしてではなく、瞑想修行の寺としてタイ人をはじめとして、日本の禪宗系の僧侶にも有名である。この瞑想法は Samatha (止)

息と Vipassana (観) 法を含み、心・身の整調によって始められるもので、即ち、心を静めて一つの対象に集中させることによって、正しい智慧が起りあらゆるものの真理(対象)を観察することにある。テーラヴァーダ仏教においては修行上での基本的な概念として、いわゆる戒・定・慧の三学が密接な関係を保ち、またその中の禪定はテーラヴァーダ仏教の瞑想の中心となる修行法である。現在この寺では夕方、六時半から瞑想堂において副住職のチャオクン・ブラ・バーワナ・ローソン・テーラ・ヴィラ・カメタモー(河北国雄師)の指導のもと、比丘、沙弥、優婆夷及び一般在家等、約二百名近い人が集まりこの瞑想法を実修している。また土曜、日曜ともなると寄進者が僧への供養に大勢みえられ齋堂を埋めつくす。彼らは僧や寺院に対しての財施を行なうとともに自らの徳を積むことによつて来世の安住を願い、僧はパーリ語による経典読誦によつて彼らの功德を普く一切に回向するのである。



堂内で点燭

さて午前六時より第一回目の食事である。僧は午前中に二回食事をとり、その後翌朝まで固形物は一切許されていない。本来テーラヴァーダ仏教においては僧としての基本的生活の上で守らねばならない四つの

訓戒があり、その第一番に托鉢に行くことと規定されている。この寺では午前五時半ごろから托鉢に出る僧が何名かおられるが、ほとんどの僧は、前任職が生前、比丘達が托鉢にまわる時間を節約して勉強ができるようにと、当時三十六万バートをかけて台所と食堂を建てられ、その役割を優婆夷達が分担しそこで作られた食事が信者からの供養として賄われている。私はここにきて初めて出家と彼らをサポートする在家との関係を理解することができた。到着後しばらくして副住職の河北先生から五月一日の午後四時から私たちの得度式を行なうとの連絡をいただいた。前々日午後の瞑想が終ってから田中師と二人で別の庫裡に住む、ブラクルー・ピッチャイ師について式次第の発音の特訓を受ける。幸い次の日に別の得度式が行なわれたので私達も参列させていただき、その一部始終を見ることのできた。この得度式の後に僧に対するタンブンが行なわれ、九名の僧が守護の呪文を読誦し、すべてのものを聖化する厄よけの靈系《サーイシン》によってブン転

送の儀式《クルワット・ナム》が行なわれていた。

実際のところ得度式までは、着いてから約一カ月位は余裕があるだろうと勝手に決めこんでいただけに決定から八日あまりしかないとなると自然に心は焦ってくる。にもかかわらず一向にパーリ語が頭に入らない。

五月一日、得度式当日、そのころになると当初に比べ体もすっかりこちらの気候にも慣れ、四月の真夏時を少し経験した後だけに日差しも和らぎ過ぎし易くなってきた。朝食後庫裡のベランダから河北先生が「今日です」と指で四時を表わし、慈愛のこもった眼差しを投げかけ大きな声で笑って下さった。私達の気持ちを察してか緊張していた心がしだいに溶けていくのがわかり、無畏の施しを受けたようでも有難く思った。

さて今回の私どもの得度式にあたってヨームを引き受けて下さった小谷氏御夫妻がみえられ、続いて我々の供養者として名のりを上げて下さったアカポン氏御一家も到着された。また友人代表としては、ワット・リアップで日本人納骨堂主事の木村聡元師、それに写



得度式後、応量器をいただく

真撮影で協力していただいた中尾茂人氏にも参列してもらいワットパクナムの優婆夷の方々にも大勢参列者全員で布薩堂の周囲を三回まわり得度式が始まった。今回私たちが得度式を受けるにあたり、戒師である住職のプラ・タンマ・テイラート・マホームニー師のタイ語での訓戒を河北先生が日本語に訳して下さるという事で、私たちにこの式の意味を一層理解させるまでの御配慮として有難くうけとらせていただいた。式も後半に入り不安ながらも十戒文のところでは羯磨師のブラクルー・ウバタン師のサポートのおかげで、二五二八年五月一日午後五時十分、ワット・パクナムにおいて、僧名ティーパラタノーとなり佛弟子として迎えていただき無事に了えることができた。途中、問障得法のところ雷鳴轟く中、俄雨が二十分程はげしく降った。が、雨降って地固まるの諺のごとく私どもの前途を祝福するかのような一瞬の通り雨であった。あがると同時に夕焼けが西の空を赤く染める中を皆で記念撮影をして長い一日を了えた。

五月三日は布薩式 uposatha が行なわれた。前日が剃髪日と定められており、比丘達はお互いに頭を剃りあい浄域をもつ布薩堂において僧伽に属する出家者全員によって行なわれる。特に満月と新月の二日間は比丘にとつて重要な「波羅堤木叉 pāṇimokkha」が読誦される。副住職の河北先生が唱文した後、パーティモツカ読誦僧が驚異的な速さで、二百二十七ヶ条の戒律を読みあげていく。この布薩式によって過去に犯した行為を反省し告白懺悔するのである。

私は昭和五十五年六月に日本において得度式を受けたのだが、タイでの今回の得度式は、僧俗の区分が不明確になっている日本仏教とは質的に異なった感じを受けました。この得度式を受けるといふことは、いわゆる出家することを前提としており、世俗を離れたところの戒律によって生きるということを自覚せずにはいられない大きな意味をもつものであると感じた。また僧伽と一般社会とはお互い合入れない隔絶した秩序があるが、還俗の自由が認められているように僧伽へ

の流入は頻繁に行なわれている。我々の僧修行もそれで形だけは整った。しかし、まだスタートしたばかりである。これからは如法に具足戒を遵守し、瞑想（カマタン）による禪定を少しずつ体得していきたいと考えている。またこの一年間の修行期間中にできるだけタイ語を習得し、お互いの国の文化交流を図りたいし、また戒律仏教のあり方や、大乘仏教との比較も含めて相互理解を深められるように努力したいと考えております。





## まごころの通ずるすがた

或る絵の展覧会に、若く美しいママさんが子どもの

口もとにスプーンで食物を運んでいる絵があった。これを見た一人の禅僧が、「これじゃ、だめだ」と、つぶやいた。そのわけをたずねると、

「子どもに口をあかせようとするならば、匙を運ぶその人が大きな口をあけなくてはならぬのにこの美人はツンとすまして口を結んでいる」と

と答えたという。

子どもに物を食べさせようという心(意)があれば、自分は食べなくとも「アーン」と口を開き、そしてスプーンを子どもの口もとに運ぶという動作(身業)が生まれてくるように、身口意の三業が期せずして一つになる。かわいい子どもに対する時だけではない。う

れしい時も悲しい時も、身口意の三業が一つになって躍動するところに、まごころが相手に通じ、感応道交するものである。

ほとけさまを拝む時もそうで、余念雑念をまじえない淨信そのものの心になった時、口はおのずから仏名を唱え、身体は合掌低頭するのである。

むかし、或るところに「念仏ばあさん」といわれるほど、朝から晩まで念仏を唱えているばあさんがおつた。このばあさん、寿命が尽きて、すべての死者のあゆむ道をたどり、エンマ大王の前に立たされた。エンマ大王はばあさんを一と目みるなり、

「地獄行き！」

と宣告した。ばあさんは、エンマ大王をにらみ返して抗議した。

「私は念仏ばあさんといわれたほどのものです。地獄行きとは見たて違いです。エンマさまにも、千に一つ万に一つ間違いがあるかも知れないと思い、生前に唱



えた念仏を車に積んで持って参りました。調べてみてください」

「ワシの目に狂いはないはずだが、証拠の品持参とあれば再審してつかわす。鬼ども、調べろ！」

そこで鬼どもが大八車に積んだ念仏を片っ端から箕<sup>み</sup>でふるいにかけて。すると、パッパッパッとみな飛び散ってしまう。ばあさんの念仏はカスばかりで実がない。

「それ見ろ、お前の念仏はみな空念仏ばかりだ。どうじゃ、わかったか!？」

その時、赤鬼が叫んだ。

「大王さま、一つだけ残りしました」

「何、一つ残った？ どれ、どれ……ウーム、小粒ながらこれはほんものだ！」

そこでこの一粒を調べてみると——或る夏の日のこと、彼女がお寺参りに出かけたとき、一天にわかにか

きくもり大雷雨となった。ばあさん、大樹のもとに雨宿りしたところ、目の前の杉の大木に一大音響と共に落雷した。その瞬間、ばあさん、思わず知らず「なんまいだ！」

この念仏だけが実のあるたが一粒として箕に残った。おかげでばあさん、地獄行きは免れたという。

ほとけさまを拝むには、身口意の三業のチャンネルを合わせなくてはならない。



佐藤俊明

# 第一期留学僧論文

## タイ留学僧として

### 私の学びたいこと

田中智誠

日本における修行道場を取囲む環境や寺院における生活も大きく変貌をとげる現在の日本だが、中国をはじめ東南アジア各国との仏教交流を通じて相互理解や認識を深めなければならないと信ずる一人である。

幸いにも私は昨年二月より三月にかけて一月間、インド・ネパール・ビルマ・タイ国と仏蹟巡拝の機会を得た。インド・ネパールは仏教の四大聖地巡拝とデカン高原カルラ山中への井戸を寄付するという旅行団団長（村瀬玄妙黄葉宗管長）の侍者として参加した。インドよりの帰途、私は單身バンコックで飛行機を降り、ビルマ・タイの仏蹟・仏塔・寺院を訪れた。

インドの聖地に足をふみ入れるということは僧侶として勝縁これに優るものはないと思うが、もつとも興味を覚えたのは南方仏教の地タイとビルマだった。それだけに彼らに今日の日本仏教の姿は理解してもらえらるうかと案じた。事実、タイ国の一般人・学生・僧侶等、私が接した限りでは、口々に「日本の僧侶はいくつ戒を持つているか？」という質問が多く、戒律に対する関心の高さを知らされた。また我が国の行持とか規矩に比較して地理的要因による風土すなわち自然環境によるところが多いのではないかと感じた。名実ともに仏教国であり、仏教の一大潮流である南方上座部の一端にふれ、認識をあらたにした次第である。

今日のタイ国と日本の関係を見ると、経済関係が主で文化的側面での交流が稀薄である。現在すでに百貨店・メーカーなどの企業進出やチキン戦争に代表される輸出入の不均衡問題が反日感情をまねき政治問題となっている。

東南アジア全般には、まだまだ微少な心情というか戦争時代の影響が根底にしこりとなって残って

いるようである。

一方我が国をふりかえって見るに、「人心乱れて、まさに天下乱れん」とする状況の中で、なぜこんななまでに即物的価値感偏向に走るのか私自身も反省し、仏教者としての立場や役割を自らに問うものである。これでは釈尊の中道の精神が日頃の教化によつていかされてはならないであらう。

日本仏教史においてそうであつたように、日本・タイ国の同じ仏教者が互に交流を計つて、互に影響しあつて宗教的成長発展を期すべきと思う。

今日、日本全国における寺院においても現実の利害や生活に追われて将来を背負う次の世代の人々が形だけの手續きや修行で終るならば、次第に宗教的活力も失われていくのではないかと心配するものである。

いままでも仏教学者や専門的研究者による学術的研究成果の積重ねの伝統はあるものの、僧侶たちによる実地の体験や交流は極めて一部のものと思う。そこで日本からも赴き、彼の地からも来てもらい、現地の僧院で生活と体験をともにし、互いに手をとりあつて研鑽し

あうことによつて仏教興隆をはかりたいものである。タイ留学僧として学びたいものは、かかる認識のもとに、地球人の禅・世界・宇宙の禅を考え行ずるための見聞と体験を得るにほかならない。

一つには、日常使っている仏教術語は中国の漢訳であり、平話、すなわち平たい日本語だけで話かないというのが実感である。それらの慣用的意味を理解することも当然のことと思うが、私自身、在家出身なので、幼年時代から法話や仏教説話にふれる機会がなかったからかもしれないが、それらの言葉の持つたヒ・キ・というか生命というか新鮮なイメージをもたらすような語感を失っているのである。それらを蘇生させんがためにも、仏教を伝播された先人祖師方の苦勞を偲びつつ歴史的に溯り、戒律の遵守と正統的パリー語聖典擁持の伝統を誇る彼の地での仏教の姿を知ることではないかと思う。他には、東南アジア全般には福建省ならびに広東省出身の華僑が大勢存在しています。バンコック市内の寺院の中にも中国の影響を窺ふとることが出来るし、華僑に

よる寺もある、たとえば、バンコック南部のバッタヤ方面に行く途中にある柴府と呼ばれる中国寺院では、毎年秋に盆行事が行なわれている。それは、長崎の崇福寺、

福戸の南京寺、宇治の黄檗山などで毎年全国から華僑の人々が集って行なわれる普度勝會と呼ばれる盆行事と内容的に同じものである。またバンコック市内でワット・ポーで見うけられる表と裏のある二つの木片（竹の場合もある）を投

げて、その組合せによって筒から箸を振りおとして番号をだす占いなどは、黄檗山の伽藍神をまつる伽藍堂で華僑の人がやっているのと同じである。同じくワット・ス

ラケットにおける読誦の仕方は東西両単に分れて対面式に行なわれ、札拝は本尊に向きなおって行うという具合だった。これは中国・日本とも共通するものである。読誦のあと一般参拝者をも含めて止観法門（法身）の静坐も行なわ

れた。以上、法式その他我が国のそれらと比較して、共通点や相違点を見いだすことは相互の関連性を理解するうえで重要課題だと思う。やれ制度仏教だ、儀式仏教だと

呼ばれる日本とは好対照をなす南方仏教徒の姿に触発されて自己の本分を見つめ直すことは、私にとっては文字どおり再出家の覚悟と言える。

## 未来社会の仏教と私の役割

私の知る限りにおいて禅は欧米各国の人々に着実な支持を得て、人的交流もさかんとなっている。

ヨーロッパの伝統的キリスト教であるカソリックと禅仏教とによる「東西靈性会議」なる組織も設立され、今後の協同と接点を求めて真摯な定期的活動も行われている。

欧米諸外国における禅の受容は、先駆的出版物に支えられた学問的興味や知的好奇心の対象にとどまらず、実際に坐禅を实践する段階まで普及している。

京都においては十五年来、欧米の若者や学生・研究者が大挙して押し寄せ、その中には出家修行されたのち立派な住職にまでなられた方もおられる。一方、ドイツ・

フランスにおいては、安谷白雲老師や弟子丸泰仙師その他諸大徳の文字どおり生命をかけた多年にわたる布教によって多くの関心と参加をもたらしてこられた。これほどまでに多くの外国人をして注目せしめ影響を及ぼしたものは禅のほかにその例を見ないのではないであろうか。それではいかなる理由によって、かかる状況変化が起

つたのだろう。彼らが無意識のうちに依拠してきたころの価値観に懐疑的不安を感じはじめた時代に、禅との出会いが新しい人類救済の光明として映ったのではないだろうか。

量子物理学者のF・カプラー氏は「夕方自然科学」で、科学自体の方法論的行きつまりを指摘され、禅をはじめとする東洋の思想哲学と特性との融合なしには今後の進歩発展は望めないことを唱えている。

禅自体は、時間と空間に拘束されない普遍的相応性をもった万人のための安楽の法門である。しかれば地球人救済のための禅を標榜し、布教のためなら身命惜まず情熱をかたむけんとする若い人材の打出が第一目標となるであろう。

が、有能なる教育者が、有効なる教育効果をあげんとすれば、やはり有効なる教育材料が必要となる。欧米の教育者の第一目標となるのは、大多数の人々に益する基本的テキストなるものを作成・普及するにあるという。大衆接化の手段となるスタンダード・テキストは、海外布教にあたっての必要欠くべからざる武器である。曹洞宗務務庁による禅のアウトラインについ

ての各国語版小冊子などすでに作成されているが、禅テキストの編集ならびに各国語への翻訳作業も優るとも劣らず大切な事業になる。編集上の技術的問題としての用語の不統一などは大同小異の問題であるので、是非とも各宗派総力をあげて取りくむ課題だと思う。そのためには、各宗各派における資料や情報を共通データとして投入し相互に利用できる情報システム

の設計や、コンピュータ・ワープロによる利用禅籍資料の編集整理などの超宗派的事業を推進せしめ、現代的互惠関係を提言する委員会も必要となる。

ヨーロッパにおけるキリスト教の果たした役割と比較して、日本の行動の特徴と伝統仏教の果たした役

割の中で反省すべき例について見るならば、戦後四十年間というものの先端技術の開発や生産能力拡大につとめた結果、経済発展と富の蓄積は評価されるべきであるが、国際競争力強化は輸出超過という摩擦を生ぜしめ、その背景には他国の資源や原材料に全面的に依存するという基本構造になっている。

外国からは「ウサギ小屋に住む仕事中毒患者」とまで言われ、これら日本の行動パターンは事後処理や対応の仕方も早いものの破局寸前まで加速度的前進を続けるというものである。それに対してブレーキをかけるべきカウンター・パワーとちてのバランス機能がなかったのではないだろうか。これは今後の国際舞台での日本の立場や役割を考えるならば、誤解を招きやすいような集団行動などは慎むべきと思う。また最近の教育問題や凶悪犯罪事件の多発などをみても、現実には仏教の中庸精神が発揮されず、これでは教化の実があがっていないと言われても仕方がないと思う。

学人接化にあたって内山興正老師は、本當の坐禪と仏法は「現代人たる自己の、生きたコトバ」で

語られなければならないと論じられている。江戸時代には盤珪永琢禪師も同内容の批判をされている。少し見方は異なるが、入霽義高氏も「出身猶可易脱體道應難」ということについて論究されている。つまりところ日本の仏教者は長らく漢訳仏教術語に頼りすぎ、平話による一般大衆布教において創意工夫がなされていなかったのではないだろうか。これは禪の基本命題にたしかえる問題であり、日本の将来の運命を決定づける課題である。では国際化の中で日本の取るべき進路はどうなるだろうか。南北問題や資源エネルギー問題をかかえながら人類共存を計るならば、現在の進路をフィード・バックしなくてはならない。

J・リフキン氏は、もともと熱力学原理から経済学ほかの理論説明に採用されている。エントロピー増大の法則によって二十一世紀生存のための提言をされている。前出のカブラー氏同様リフキン氏も禪自体のポテンシャル・エネルギーともいふべきその先在的使命と時代の相応性に着目された上で述べられている。またインドでナ

ショナルプロジェクトに参画され

たこととある糸川英夫氏は、エネルギーの濫費と自然破壊の上に成りたっている現代文明に警鐘を発している。すなわちエントロピーの法則で世界を計るならば、インドこそ「超先進国」であり、このままいけば今までの先進諸国は自滅への道をたどる可能性があるということである。

今日北半球諸国で直面している問題や将来に対する不安は、科学的側面からのアプローチや分析を包摂しながらも科学を超え、宗教的枠組からも解放される禅によって解決され、救済の導かれるものと信ずる。これからの仏教界はその体質改善のために互恵的超宗派的事業の推進にあると思う。そのためには、認識と理解を求めるべくPRも必要であり、運動の輪も広げなければならない。人間一人て出来ることは時間的空間的に限られるので、互いに智慧を出しあうって人類救済の大目標に向って大誓願をたてようではないか。微力ながら先駆者の足跡を継承して菩薩願行に出むかんとする一人である。



## タイ留学僧として 私の学びたいこと

梅田尚平

私は現在、浄土宗に僧籍をもつ一僧侶である。二十二歳から二年ほど会社づとめをし、五十五年の春に縁があつて印度四大仏跡を巡拝してきた。

日本では感じるこのできない大陸観と、悠久の古代より今も変わることなく滔々と流れるガンジス河と共に生きてきたヒンドウー教徒達に接し、その厳しい自然環境、タテとヨコの関係で強固に結ばれた四姓制度の社会権造の中で彼らが自ら人間であることを主張しうる唯一のものは何なのか。宗教及び思想において他ならず生きていることの証明と、彼ら自らに課せられたカーストを許容しうるその信仰心の根底にあるものをこの身で実体験した。そして帰国後、感動さめやらぬ間に、現師匠に師事、得度を受け、四年有半、寺務の傍ら宗乗、余乗について学んで

きた。

現代において法然教学もたしかにわれわれ五濁悪世に生きる罪悪生れの凡夫救済のためには、時機相應の教えではあるが、時代をさらに溯り、釈尊まで遡つてそのみ教えを受けたいものと考えている。そのためにもろもろの器塵を離れて、開明に仏教を修めることのできるシチュエーションに自らを投入しなければいけないと考えます。煩雑な日常生活の中においては、静慮と智慧によつてうるべき阿羅漢への道は、凡夫にとつてたいへん険しく遠い道である。

現代の機械文明のただ中にあつて、生まれつきのままの念仏と仏の本願力により、生かされて生きるということと、凡夫の自覚・還愚ということとを大義名分としていれる自分がつき変革を求めているのであるが、かくいう私自身をも含めて、そこに安住し自分自身の問題が一つの矛盾となり、その恩恵を甘受しつつ、しかも報われようとはしない現実において、物質至上の文明と言葉過剰の思想の中で、私自身何らかの実践が必要であると考えたのである。しかしながら、現実においてその実践方

法を見出すことが非常に困難なことに気がついたのである。

そこで私は僧修行の形式のもつストイックな厳しさが釈尊在世の當時を伝承しているテラヴァーダの教えにこそ、いま最も自分にとり必要な実践課題として与えられることを望んでいるものです。

仏陀が人間苦を悩み、やがて縁起の理法によつて目覚めたという心境のあり方は、いろいろ經典に説かれていますが、要するに人間苦の原因を求めて無明に到達し、無明を滅すれば、人間苦も滅することを悟られたのだと受けとめている。

私は、法然上人の三学非器に至るまでの思想的変遷を、この機会に実践してみ、なぜ聖道門を捨て、浄土門に帰入せられたのか、一度外側からみて内省する必要があるのではないかと考えたのである。

私がタイに留学して学びたいことは、所謂、三蔵と三学による自己の苦よりの解脱、無明の滅却をめざすものであり、中道と八正道の実践により実存の構造を正しく認識することにある。

仏陀の出発点は万人に共通する

人生苦、人間苦の問題解決であり、そのゴールとされる悟り、寂靜の境地を求めようとした点にあると考えられる。私自身も自らの道を求める為、半僧半俗の生活を捨離し、僧伽に入って三衣一鉢の生活をするので再び家を出て、一般の社会生活とは次元を異にするのが第一であると考ええるものである。

テラヴァーダ僧としての修行に甘えは許されないことは覚悟している。伝統的で厳密な形式主義と、繰り返される分析的説明の中で冷たい個人主義と合理主義が含まれるといわれているが、テラヴァーダの教えが、戒律の救いといわれるように、二二七ヶ条のパーティモツカを厳守することというにおよばず、テラヴァーダ僧の生活が厳しく大変なものであるというのも、またタイの人々が僧の生活に尊敬の念をもつのも、ひとえにその生活を律する規律の厳格さによるところが多いと聞いている。出家集団は釈尊在世当時から保守的な姿をほとんど変ずることなく今日に至っている。一樣に黄衣をまとい、パーリ語をそらんじ、古語をかたくなに

信奉している。このパーリ聖典の教えは明瞭であり、首尾一貫した仕組みを呈し、とりわけそれは実践するに従って効果をもち、その教えに従って現に非常に高い境地にまで進んだ人々がおられると聞いている。私は仏教を実践するための最上の道は、仏教自身の言葉を守っているパーリ聖典の中にあると考えていたので、是非ともこのパーリ語による經典読誦と理論を修得したいと考えている。現地ではめまぐるしく変わる環境の構で、自分自身と向かいあってみることができそうである。生まれてこのかた、外ばかり見てきたが、この辺で目の玉をひっくり返して自分を見つめ直し、自分とのコミュニケーションを持つことができないのではないかと思う。私は以前よりタイにおいて僧伽に入って自己の解脱に専念することに魅力を感じ、これを可能にしてみたいと常々考えていた。

家を支えてゆくためには、朝な夕なそれぞれの家業に全身をうちこまねばならないというのがふつうの人の姿である。もともと仏陀の教えは主として能力があり、しかも家を出ることのできる立場にあるエリートを対象にしたものであると考えられる。現在において仏教が発祥地のインドでヒンドウー教に吸収され減んでしまったという理由もこの辺にあると考えられている。その点、タイにおいてはテーラヴァーダ派はまず王権の中にその支持を見出し、出家教団は王室の庇護によって確固たる物質的基盤を与えられた背景があつて、しだいに民衆の中に浸透しその社会生活のすみずみに大きな影響を与える勢力へと成長して今日に至っているといわれる。根本分裂によって変革を求めた進歩派によって大衆部はおこされ、救済への可能性を大衆の手に解放した大乘仏教も明らかに古い教えのある面から出発したものであり、テーラヴァーダ派を理解することは、マハーヤーナ派を理解するための為の本質的基盤であると考えられる今において勉強できる時は他になく、シッダールタ王子が出家された二

十九歳と時を同じくして私も再出家の機が熟したと考えている。

テーラヴァーダ仏教の教えを、釈尊の言葉を借りていうならば、私はこのことに尽きるのではないかと考える。

『おのれこそおのれよるべ  
おのれを措きて誰によるべぞ  
よくとのえしおのれにこそ  
まこと得がたきよるべをぞ得ん』

ダンマパター一六〇 友松圓諦訳

このお言葉のように、依るべきものは自己自身であつて、よく調べられた自己こそが本当のよるべなのである。それはまた普遍的な法に依ることである。法を仕得し実践する自己こそが本当のよるべである。この釈尊が説かれているその意存を実証せんがために私はタイで勉強したいと考えるものである。





## 仏教の国際化と

### 私の役割り

昭和もすでに六十年、激しい変動に見舞われた二十世紀も余すところ十五年となった。次の二十世紀に向けて人類が取り組まねばならない課題はきわめて多い。なかでも相変わらず世界各地で紛争が起り、アフリカをはじめとして膨大な人々が飢えに苦しんでいる状況の中で、仏教が果たす役割とはいかなるものであるか考えなくてはいけない時にきていると思う。

現代の自然科学の発達を目をみはる勢いを示し、天体を仰いで宇宙時代に入り、分子や原子の極微の世界においては生命の人工合成も夢ではないといわれている。科学のもたらした恩恵は非常に大きなものがある。マス・メディアの発達は、遙かな遠い国の事件や風景を瞬時にブラウン管に映しだしてくれるし、人間の仕事は効率化され、労力の省力化が進められている。また医学の進歩には歯止めがかけられるのだろうか。臓器移植技術の発達や死の判定の問題、救急医療の進歩によって人間の寿命が延び、男女とも平均寿命が七

十歳台となり、簡単に死ぬことができないう世の中になって、老人社会の幕開けともいわれてきているのが現実である。

物ばかりが豊富になった時代において、精神的な価値を求める動きが最近若者の間に強まってきているように感じられる。

パソコン・ビデオ・自動車・AV機器等、科学技術の産物に強い関心を寄せる反面、心の平安を求めようと寺院を訪れ、法話に耳を傾け、静寂の中に自らを見つめなおそうとする気持ちも内在しているのである。何不自由なく気ままに育ってきた彼らも独りになった時、自分の生き方に対して感じる不安などから、心の充足を求めようと、仏教や宗教書を読んでいるという。しかしこれらが直接信仰へと結びつくわけではないだろうが、現代の若者達が心の救済を求めようとしていることは確かかなようである。

現在、環境や資源の問題をはじめとして、様々な面から物質文明のゆきづまりが指摘されているのだが、物質ではなく、精神的な価値を求めようとしている現代の青年達の心は未来に向って新しい可

能性を開こうとしているのではないだろうか。かくいう私自身も、戦後の高度成長期と平行してその恩恵を受け、暖衣飽食に甘んじて僧籍を汚してきた一人である。仏教も釈尊当時から時代につれて発展し、変遷してきた経過をふまえ、来たる二十一世紀に向けての現代文明における多様化にいかに対応していくか。また、私が将来仏教者として果たす役割もけつして小さくはないと考えている。

国際化時代に入り、日本は先進国の一員として、世界を股にかけて国際交流にはげんでいる。今やどこへ行っても日本人がいない国はないかもしれない。戦前の軍事大国から、経済大国として立ち直った日本経済の実力は、各国でトラブルを起すほど高く評価されている。その中には現地の宗教に無知である為は無用の文化摩擦を生じている例も多いと聞いている。聖徳太子にまで溯れば、日本の国際化は仏教によってプロモートされたと考えてよいはずである。

観光や経済の交流もたしかに大切ではあるが、国際化の中身がそのことにのみ重点がおかれているようではいけないのであって、真の

国際交流とは文化の交流であって思想の相互理解であり、精神のふれあいではなければならないだろう。欧米崇拜一辺倒にならず、すべての国々、特にアジア・アフリカ諸国についての理解を深めるとともに、その国々の人々に日本を理解してもらう方法を積極的に模索していかなければならないだろう。

現代において仏教は新しい意義を獲得したと考えるとよいだろう。西洋文明に刺戟され、また国際的にも諸国にわたって社会情勢が変化したので仏教はその伝統的な価値体系を新たに評価し変革を迫られている。

仏教の新しい教育施設、研究調査機関、在家仏教徒の活動の活発化、多くの国で新しい仏教徒の団体が形成され、新しい運動が開始されている。近年では種々の国にわたる多くの協力活動が始まっている。また世界仏教徒連盟の結成、世界仏教徒会議の開催など、仏教徒の国際活動は日々隆盛となりつつある。

玄奘が中国からインドへ旅行するには道中だけで数年を要した。ところが今日では日本からインドへは一日のうちに訪れることがで

きる。新しい学問が発達し、通信、旅行の新しい方法手段が開発されるにつれて世界諸国の仏教徒たちは増々互いに緊密になりかけている。近い将来、諸国の人々を仏陀の道に結びつけ、そして世界平和を実現することができようになれば、仏教の国際化としてこれほど望ましいことはないと思われ。なぜならば仏教は武力を用いずに世界諸国に広まった唯一の普遍宗教だからである。

仏教の政治理想も、仏教の政治的指導者によって高く掲げられ、特に国際的に重要な意義をもっている政治家連によって実践された為に世界政治のうちにおいても力を得つつある。もちろん宗教には排他的独善的な一面があるが、仏教は他の宗教に比べて寛容性に富み、合理性の豊かな宗教であり、これからの人類の指導理念として期待されるところが大きいと思われる。そして仏教のもつこの寛容の態度は種々異なった宗教を協力させ、様々なイデオロギーの対立を解消し、世界平和を実現するために健全な基礎を提供することになりえる可能性をもっている。

私自身、受けがたい人身を受け

た以上、生きぞこねでなく、本当に生きたいと考えている。生命尊重は世界の合言葉であるが、地球上に殺戮をこととする戦争は絶えていない。また日本には食糧が余っているが世界のどこかでは毎日数千人の餓死者を出している。このような悲しい矛盾がなぜそのままだけ置かれているのであろうか。生命尊重も社会共存の徳目もみな政治的駆引きが優先するからであろう。所詮、法律規則、人倫道德は人間同士が作った仮の約束であって人間が本当に生きる尺度ではない。このゆきづまりを解決してくれるには宗教的基準に求める以外にないであろう。

われわれにとってアフリカの飢餓と寒さに襲われている多くの難民の苦しみは到底計り知ることができないだろう。政府は昨年、飢餓で苦しむアフリカに対する支援施策を固めた。この中でアフリカ協会など民間団体と協力して、『アフリカの支援基金』を創設、日本人ボランティアの活動を側面援助する方針を打ち出している。私もこれらアフリカ諸国の情勢を憂い、昨年の暮より、法友と協力し、飢餓難民救援のための托鉢行を始め

た。この行の実践は所謂、自利利他の菩薩行となり、それによって得たところの善意はわれわれを通して社会に還元される目的をもつものである。

すべてのものが相依り、相扶け、もちつもたれつ、活かし活かされる関係にある以上、われわれは他人の支援と一般社会の恩恵とに感謝すると同時に、すすんで他人や社会に対して感謝と報恩の意味における奉仕の行動に出る義務を課せられていると受けとらなければならないだろう。このような梵行を修めることによって、国境を越え、人種や宗教こそ違えども仏教者の社会参加として国際化の一翼を担うことができたらとねがっている。

現代文化の矛盾と迷路からの脱出という重大な問題の解決に寄与し得るものとして、仏教への期待が増大しつつある現実を認識しなければいけない時がきているのではないだろうか。われわれ日本の仏教者も多様化と近代化へ積極的に対応していくためには、伝統の圧力や教団の權威を排し、自らの宗教の近代化へ積極的に取り込むことなしには現代社会のエートス

に関わることなど到底できないであろう。

今年は一九七九年の国連総会で決められた『国際青年年』である。

『参加』『開発』『平和』をテーマとし、青年の健全な育成と積極的な社会参加を促し、人類社会において貢献しうる資質を啓発することを目的としている。二十一世紀にむけて仏教者は視野を広くもち、国際化社会の要望に答えられようような平和宗教として自覚と誇りをもち、全世界に教線を拡大していかなければいけないと考えるものである。



▼『成寿』第三号をお届けします。

昨年一月十五日発足した善光寺海外留学僧派遣育英会は、去る四月十八日、二人の留学僧をタイ国ワット・パクナムに送る壮挙をなすとげました。それらの記事と共に今回は南方の仏教を特集しました。

▼善光寺海外留学僧派遣育英会の名譽顧問、曹洞宗管長・大本山永平寺貫首泰慧玉禪師が一月二日御遷化になられ副貫首丹羽廉芳老師が狛座におつきになり、曹洞宗管長にご就任されました。四月十三日、江の島に御巡錫になられたのを機に、参上して名譽顧問御就任をお願いし、御快諾をいただきました。また、大本山総持寺監院齊藤信義老師を顧問にお迎えしました。

▼『成寿特別号』「ゼロからの出発」

はおかげさまでたいへん好評を博し「中外日報」はじめ宗教新聞がござって取上げてくれましたし、『女性仏教』では方丈さんの「大なる哉ころ」を連載しております。今年の冬ごろには特別号第二号を発刊する予定です。

▼三月上旬、善光寺護持会結成趣意書をお送りして御協力をお願い申上げましたが、おかげさまで六月十一日現在五六一件の申し込みがありました。まだお申込みでないお方は何卒ご賛同ご入会をお願いいたします。

▼五月十日、恒例の婦人会研修会は伊豆修禪寺詣り、参加者四十名、盛会裡に無事円成しました。  
▼今年もお盆の季節がやって参りま

した。

七月九日は一般の方々のお施餓餉を、七月十日は今年新盆を迎えられる方々のお施餓餉を行ないますので、お早目にお申し込みください。

▼七月二十三、二十四日は、恒例の本坊光真寺夏祭り参拝です。なお泊りは閑静な鬼怒川温泉です。ふるってご参加くださるようお待ちしております。  
(小熊)

成寿 第三号

昭和六〇年七月一日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野町一六〇四

電話 〇四五(八四五)一三七一

印刷所 神奈川新聞社出版局



いたく母に叱られた幼い日  
かんしゃくを起して  
父の大切な湯呑みを割った  
黒ずんだ荒れた掌で  
黙って破片をかき集めてる母  
破片の上にポロポロと  
涙を落すのを見た  
母のすすり泣く声は  
幼い私の胸をえぐった  
落陽が母の横顔を紅に染めた  
はるかにも遠い幼い日  
私は声を挙げて泣いた  
ごめんなさいお母さん  
六十路のいま  
声を限りに泣きたい  
あわれ大慈大悲よ

遠藤太禅「観世音声を限りに」より

